新女界

第四卷第七號目次

○青年の希望と失望（一）……安井哲子
○夏の祭（一二）……文學博士 姉崎正治
△枕頭の暗（一八）……日高沈靜
○其の後の金森家（一九）……記者
○話し方の研究（二三）……久留島武彦
○彩虹庵を訪ふ（三〇）……野口精子
△下婢の爲めの講演會（三四）……記者
○外國婦人討論會（三五）……記者
△耳學問の卒業者（三九）……S. T. 子
○自然と子供（四二）……海老名みや子
○餘裕ある生活には規律が必要（四八）……某夫人
△夏期の哺乳兒の榮養（五一）……醫學士 山下清
○ローヘングリイン（五四）……三枝幾子譯
○隨感（六六）……
△近頃の大發明（野口幽香子）△臨時利用（海老名みや子）
△復活（笠間しのぶ）△何故に心弱きか（小橋三四子）
○エリオット博士の來朝（七〇）……記者
△編輯だより（七二）……編者
○恩寵の靈（五）……海老名彈正

東京新人社發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

毛髮を養ひ
癖毛を矯し
芳香の永く
薫る

千代田香油は

夏季香水の代用ともなる
高評嘖々たる佳品なり

定價 七十錢 卅五錢 廿五錢 十七錢
郵税四錢

英國リバー會社製造 最良の浮石鹼は

スワン石鹼

本品は泡立ちよく肌さはり滑かにして經濟と衛生に適す

千代田香油本舖
スワン浮石鹼輸入元

山岸三之助

東京……馬喰町
大阪……鹽町
振替東京二〇五〇〇番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

高島平三郎先生著

最新刊

家庭及家庭教育

菊版總クロース
定價九十五錢
送料八錢

兒女運命の良否は家庭の良否如何に關係す、健全なる家庭は人情の殿堂にして、修養の學校たると共に成業の温室也、本書は筆を家庭の根本義に起し著者が造詣深き心理學教育學等の立場より剴切に家庭教育を詳説したるものにして、能く我國固有の道德習慣を斟酌して從來閑却されたる年中行事に至るまで多大の注意を拂ひ、立論的確にして引證該博、就中母の教訓の如きは一字一涙淺薄なる現代思潮を戒しむる處眞に金科玉條たるを信ず。

米國ケーラス博士著
高島平三郎閲
石川弘譯

新刊

家庭に於ける兒童教育の理論及實際

定價七十錢送料八錢

石黑男爵題辭
石川弘著

學校家庭訓話 通俗孝子傳

定價六十錢送料八錢

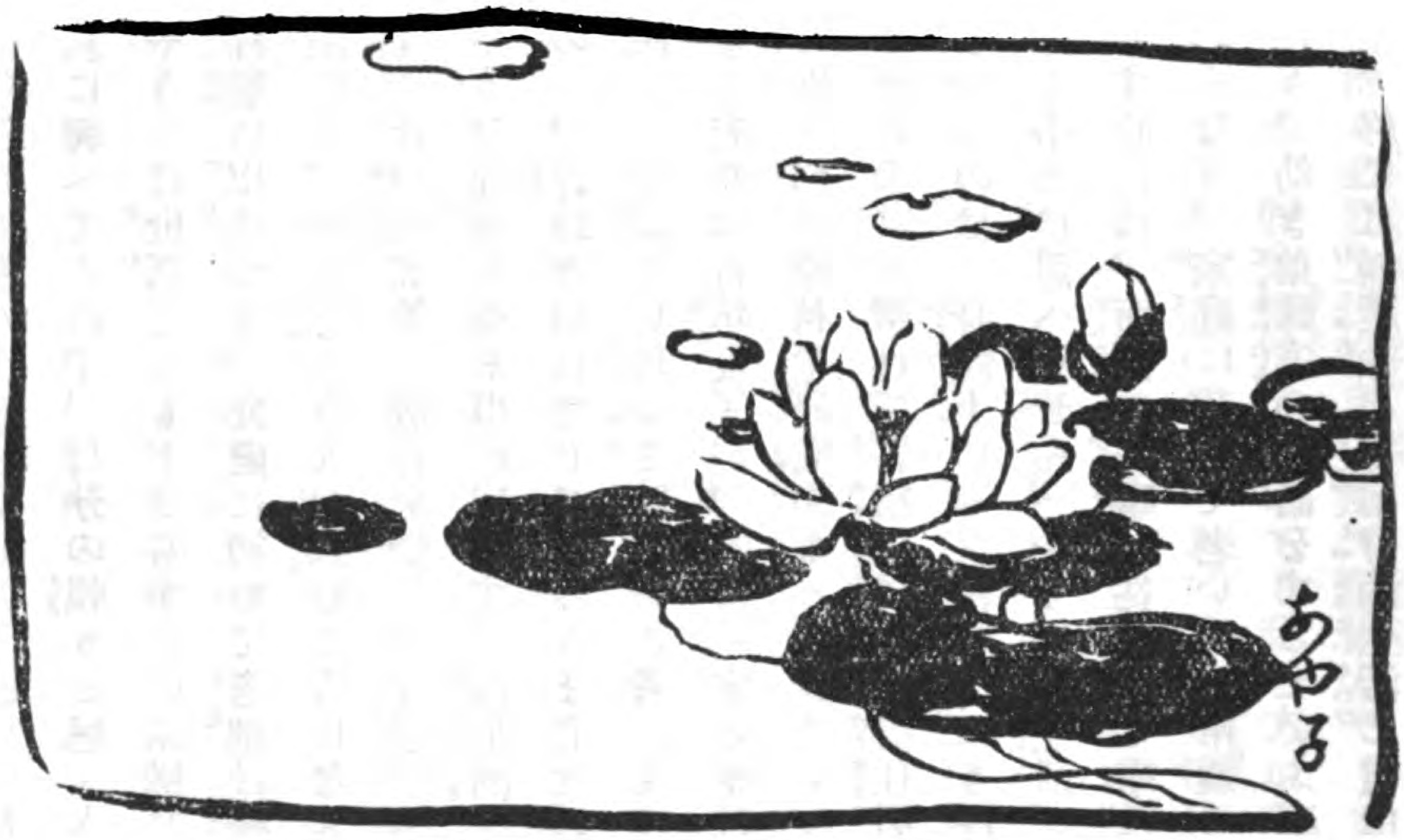
發行所 東京麴町二丁目二番地 振替東京二〇一九一四番 洛陽堂

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「かれこれと迷ふこと勿れ
完全無缺なる大學目藥あり

大學目藥は帝國醫科大學病院の處方に基きし貴重の製劑にして●はやり目●トラホーム●星目●のぼせ目●かすみ目●血目●疲目其他眼病一切に驚くべき奇効あり●全國各地有名の藥店にあり

新女界　第四卷　第七號



明治四十五年七月一日發行　第四卷第七號

青年の希望と失望

安井哲子

學期の終も近づきました。全國の女學生方は一方に暑と戰ひ、一方に試驗と鬪はれつゝある事と深く御同情申す次第であります。併苦あれば樂ありで、此苦しい仕事の後には嬉しい暑中休暇が待つて居ります。之れを樂しみに今暫くの間奮鬪をお續けなさい。凡一生の中で最活氣のある最愉快な時期は青年の時でありませう。將來は長し、理想は高し、希望には充ちて居るし、此世界は自分の力一つでどうでもなるかの如くに、意氣甚盛な時であります。苦しい事といつても一年三回の試驗位で、之れとても進歩の一階段であると思へば、其中に大なる希望が伴つて居るのであります。

ところが一度學生々活を終つて社會に出て見ると世の中は中々學校で想像して居たやうな者ではなく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

自分の力相應の仕事を見出さうとしても、他人は容易に與へてくれず、自分の頼りと思ふ人々も思つたやうには世話しても下さらずといふ樣な、冷やかな經驗に出逢つて、此處に初めて意地は挫け、希望は消えて、世を悲しみ人を惡むやうになるのであります。比較的高等の敎育を受けた女子の方々で、望むやうな仕事を得る事が出來ず、流浪的生活をさるゝのが、近時次第に增してまゐりましたのは事實で、決して喜ばしい現象ではないと考へます。何の仕事をも有たぬ青年女子が、既に一定の學校を卒業して特別に何の學科を研究するといふでもないのに、遠く兩親の許を離れて寄宿住居や下宿住居に日を送るといふのは、身體上にも又精神上にも決して利益のある事とは思へません。かういふ生活を久しく續けます時には、面倒な家事に從事する事は次第に煩はしくなり、家庭に在つて老いたる兩親の機嫌を取つたり、幼き弟妹達の世話をするといふ事が面白くなく、終には無趣味な寄宿舍的生活に自由を喜ぶ習慣がつくのであります。

私は右のやうな種類の青年女子に度々出逢つた事もあり、又其心の苦悶を聽いた事もありまして、其中には深く同情すべき點もあると思ひます。且又是等の人々の中には、學生時代に抱いた理想や希望が實行せらるゝまで、暫くかゝる生活を續けやうと覺悟して居る方も見受けます。併學問のある方々は、必しも普通の人々と異つた生活に入らねばならぬ者ではなく、又必しも入り得る場合のみは御座いません。寧其平凡な家庭生活中に在つて、其處に普通の人々の見出し得ぬ一種高尙な趣味と、快樂とを樂しみ得る處に、學問した價が見ゆるのではあるまいかと考へます。

或私の知人が必要上一時他人の家に働きを求めましたところが、其家の人々が自分に尊敬の言葉をつかはぬとて立腹し、直に其家を立ち去つた事があります。誰でも他人に尊敬せらるゝのは愉快で、輕蔑せらるゝのは不快に違ひありませんけれども、衣食

を得る必要上、自卑下して勞働しやうと決心したからには、假令輕蔑を受けても致し方がないので、少くとも尊敬せられぬといふだけの覺悟は、初めから有つべきであります。併よしや其名は呼び棄てにせられ、命令的の言葉を多く用ひられても、自分が人として高尙でありさへすれば、自分自身の心から奴隷になつたといふ事ではありますまい。他人に敬語をつかはれぬ位を苦にする樣では、其人の心中は大抵推測し得るのであります。

高い理想と希望とに充ちた靑年の方々が、時として人を恨むのは卽此類で、自分の價値は自分以外、誰も彼も知つて居そうな者であるやうに感ずる結果他人が自分を了解せぬと腹が立ち、社會が己れを用ひぬと恨めしく思はれるやうになるのであります。

併吾々は自分自身、此靑年時期を通過して來ましたから、此點には充分の同情が出來るので、今日こんな理屈ばつた事を申すのは、自分自身に幾度か失敗もし、失望もし、又悲觀もした結果であります。

そして吾々人間は實に妙な者で、自分で經驗して見ぬ中は、他人の話は充分に信ずる事は出來ません。況して元氣の盛な靑年期には、自分より年長けた人の言葉は、何となく皆古くさく聞こえ、且又敎訓めいた事ばかり言つて、少しも靑年の自由を認めぬと不平に思はれるのはまことに自然であります。

其故に私は一から十まで年長者のいふ事に服從なさいと申しません。併ながら種々のつらい經驗を嘗めつゝある中に、希望の光を見失はぬ樣に、又失敗毎に一の敎訓を見出して、次第に理想に近づかるゝ樣にされたいと希ふのであります。吾々の樣に種々の苦痛に出逢つた者は、假令悲しい事があつても、非常に落膽失望して自暴自棄するまでには至りませんけれども、樂しい事のみ多い單純な學校生活から直に移つて此社會に初めて嘗めた若い經驗は、往々過度の刺戟を年若い人の精神に與ふる者であります

之れが時とすれば、世にも恐るべき自殺や、精神病の原因となる事があるので、失意の境遇にある靑

年男女を取扱ふ父母先輩の大に注意すべき所であります。冷淡な訓戒は青年の最厭ふ者で、彼等の失望落膽は愚か、自暴自棄にも充分の同情を寄せて、而も之れがために身を亡ぼすの愚を懇切に示すのが、是等の人々に對して年長者のなすべき指導であります

そこで理想から申せば、學生は試驗のために勉强するのではなく、一生のためにするのであり、又吾々は一時的に働くのではなく、永遠的に働くのであります。其故に假令其現時は如何であらうとも、皆永遠の目的に達する途中にあるので、之れを眞面目に通過せねば、何時まで待つても、目的地に達する事は出來ません。現に試驗に苦しみつゝある學生の方々には、點數の競爭や、卒業の際の名譽などの卑近な所にのみ目を付けず、社會に出て後幾多の困難と惡戰する一の準備として、又是等の運命に對する一の訓練として、其結果の善惡に論なく、最眞面目に出來得るだけの力を盡し、此の責任相果てゝ、樂しく嬉しく夏季休業を暇い家庭の中に過ごされん事を切望するのであります。

《うめくさ》

▲學窓から出て、始めて世間の生存競爭といふものを味ふ青年は森の木を見ても、强食弱肉を思ふて涙すると申します。自分が學生の頃は、世の中の人がいかにも氣樂さうに見え、これもあれも先づ卒業してから遣り直さうと、學生時代を腰掛けの氣分で過して終う者が澤山あります。

▲然し勉强は學生時代に致さないで、何時する事が出來ませう。成る程人は生涯學生の態度を失はず讀書もし、勉强もしなければなりませんが、世間に出れば、學生時代より更らに重い責任が待つて居ります、一旦その責任を負ふた以上は、決して學生の暑中休暇といふ樣な責任を逃れる折があるのではなく萬一責任の重さに堪へずして、もがいて逃れ去ればそれは世の敗者となる許りであります。　（三四子）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

教壇

恩寵の靈

海老名彈正

△義理を逃れたる隱居の生活

義理を重んずるはよい事であるが、常に一種の弊害が伴ふ。儀式ばるとか、虛禮とか云ふことになるのである。日本の封建時代の儀式は頗る力あるものであつたが、其末路は誠に生命なき一種の形式になつてをる。夫れも強ちに惡くはないが、如何に儀式ばつたかは、其餘弊たる今日の形式的の交際でゝもわかる。人々の交際にせよ、此方から尋ねると、先方も行きたくないが尋ねて來る、品物を貰ふと、その評價をしてて此方からも夫れに相當するものを返す、折角の親切もこう云ふ儀式ばつた風習のために親切にならぬ、何でもかでも一種の義理づくになつてしまうのである。之れはなきに勝るか知らんが、如何に乾燥無味であるか、淺薄で、生命もなくつやもあやもなく、その如何にうるさかつたかは、彼の隱居と云ふ風習が之を證明して餘りありと思ふ。我國の所謂隱居なるものは、即ち親類の交際とか、一鄕一村の交際とか、社會の交際の義理づくな、うるさい交際から脫却して、自己の思ひのまゝに自由な暮しをすると云ふことである。隱居だから御免を蒙る、着物でも交際でも隱居だからと云ふので、煩はしい世を遁れて悠々自適の生活をなすのである。之れは今日と雖も同じで、今日の社會は全く義理づく

めの社會である。形式的な誠に動きのとれぬ社會である。教育界、政治界皆義理づくめで、法律の如き尤も甚しきものであつて權利と義務あるのみ、何等温かい情味を見出すことが出來ない、凡てが形式的で器械的である。

△宗教社會の義理

然して之れは獨り俗社會のみならず、宗教の社會にも夫れがあつた。何もかも義務的形式的で、人は神の要求に應ずる義務ありと信じ、此義理を盡すことによつて、神の報を受けるとした。即ち報償主義で、悉く算盤ではじくのである。これ丈けの義理を盡したから、之れ位の報があるであらうと、常に天秤でかけて計算したのである。佛教の因果律の如きも即ちこれで、地獄極樂の說、善行あれば善果ありとするが如き、皆この報償主義と云ふべきである。舊約のアブラハムに關する教訓の如きもそうであるアブラハムは多くの義しき行ひをなした。然るに夫れに對する神の報は少くして、之を彼一代にて勘定すれば、多の餘分がある、そこで時の學者は之を解釋してアブラハムは子孫のために德行の蓄積をなしたるものとし、之を民族の寶として、國民の義務の足らぬ所は先祖の貯蓄即ちアブラハムの餘德を以て之を償ふものとしたのである。此の風は彼の天主教などに尤もよく現はれてをる。彼の僧侶が難行苦行をするのは神に對して多くの犧牲を拂ひ、僅かの報を甘んじて其餘分を教會に貯蓄しておくと云ふにあつた。而して惡いものが教會にあれば、是等聖人の德を以て神の前に差引くのであつた。此の義理づくめ、勘定づくめの道德又宗教と云ふものが、吾々人間の中にあるのである。其個人の供德を分ける、餘德にあづかる、俗に之を恩寵と云ふのである。

△基督の恩寵

これには餘程ふかい處がある。基督の十字架の如きも此意味に解せられてをつた。基督は神の子で、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

其儘にして榮光の子であつた。然るに事實は全く之に反し、彼は貧しき職人の家に生れ、生れながらの逆境に生長し給ふた。しかして其最後は實に何人と雖も遭遇せざる大悲慘大逆境大屈辱を受けられた、其德行と其境遇とは眞に天地雲泥の差がある。之を秤量にかくればその貯蓄や實に莫大なるものである之れ卽ち基督が萬民のために大なる蓄積をなしたるもの、基督を信ずるものは此恩惠に與る筈のものである、それが卽ち基督の恩寵であると解したのであつた。之れは基督の弟子達も皆しか信じてをつた。パウロの思想などは殊に明かに之を見ることが出來る。如何に其時代の人心を義理づくめの宗敎道德が支配して居つたかがわかる。處が基督によつて恩寵の意味が變つて來た。基督はどこまでも之を精神的に見給ふた。同じく他より賜ふのではあるが、器械的と精神的との相違がある。基督の建德は報を得やうと云ふのでない。やむにやまれぬ精神の發露して行に現はるゝのである。せねばならぬ、やらねばならぬと曰ふ義理合いからでない、本心の衝動が默せんとして默する能はざるのである。左ればこそ人の儕に伍するを潔しとせざる税吏、罪人、妓女にも無限の同情を表し給ふた。健かなるものは醫者の助けを要せず、唯病あるもの之を要すと宣ひ、我來るは義しき人を救はんがためにあらず罪あるものを悔改めしめんがため也と說き給ひしが如き、皆此精神の發露に外ならないのである。報を求めずに人に同情する、之れ實に打算的報償主義の信仰に對する大打擊にして、非常なる大見識と云はねばならぬ。基督の言なりとしてパウロの語れる「受くるよりも與ふるは幸ひ也」の語は、恐らく基督の言であらう若し然らずとするも確かに基督の大精神を言ひ表はしたる貴き言である。何等の條件もなしに與へて行く、そこに恩寵がある。基督の恩寵はそこである。其深いところを以て神の思召にあてはめる。神は無限の愛である、神は我々の善行によりて恩寵を與へ賜ふにあらず。税吏にも罪人にも同じく與へ給ふの

である。ペテロが何度許すべきか、七度かと尋ねし時、七度を七十倍せよと云はれた。七十倍とは四百九十度と云ふ數字上の意味でない、無限に許せと云ふことである。日本では佛の顔も三度と云ふ俚言がある。ペテロが七度かと云ひしは非常に奮發して云つたのである。然るに基督は之を無限に許すべしと仰せられた。之れ實に人の心でない、神の心そのままである。基督の大精神は之れである。この無限の愛心これ卽ち恩寵である、パウロも無限に出づる愛を稱して恩寵と云つた。恩寵とは愛の精神から自然に湧くところの、相手の行を目安とせず、自分の精神から出るもの、愛の力によりて自から出づるものである。其相手には報でなく行である。之卽ち恩寵の靈である。

△母の愛

此行の精神を尤も具體的に表はしてをるものは、親子の間柄である。親の子に對する愛は醇の醇なるものにして、何等の報を望まない。全く無條件である。尤も中には報を望む親もないではないが、夫れは眞の親心ではない。又彼の誡律主義の義理づめの天主敎の如きも、そこが第一義ではあるまい、それは外にあらう、卽ち母崇拜である。聖母崇拜は天主敎の生命である。之れには味ひがある。我國にも觀音と云ふものがある、慈悲の相を備へたる所は仲々よいが、マリヤには子があつて觀音には子供はない子のなき觀音より、子供を抱いてをるマリヤの方がそこに暖い味がある。日本にも子抱觀音と云ふものがあるが、アレは大方マリヤの變體であらう。かの邦外の慈母觀音の如き何人も賞賛するところであるが、あれをラフワエルの聖母子に比するに如何にも物すごい淋しい處がある。之れは云はずとも佛敎の感化であらう。聖母子の像には上を向いてをるのもあれば、中程に向つて居るものもあり、又下向のものもある、之れは皆時代の思想を表はしたもので、之を研究すれば色々と興味ある問題がある。兎に角

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

此母が子を持つ事によりて輝いて居るのである。或畫は嬰兒を床上に寢せてをると、其赤兒から五光がさして母の顏を照すと、母の顏が神々しく輝くところを畫いたものである。之には大なる意味がある。

母の子に對する態度は實に恩寵である。何等の報なしに嬰兒を愛する。嬰兒は母に向つて何等報ゆることは出來ない。何の報いらるゝ處なしに有りと有らゆる愛を與ふるのである。こゝに尊い意義があるのである。母崇拜は歐州に於て見るところであるが之れには如何にも意義があるのである。此親子の恩愛の態度が天地の神のみ姿になぞらへらるゝことが出來る。之れは基督の人格、基督の聖心をたづぬればわかる。基督の十字架は義理づめでない、律法的贖ひではない。實に無限の恩寵の輝きである。彼は眞に我を忘れて愛心を施すもの、彼れが十字架の上にありて、父よ彼等を許し給へ、彼等なす所を知らざれば也と宣ひしは、天下萬世之れ以上の愛はないのである。之れ實に恩寵の最大顯現、之を律法的贖罪主義を以て解説せんとするは淺薄の見と云はざるを得ない。

△恩寵の靈のみは衰へじ

この親の子に對する深い暖いものが、即ち恩寵であつて、恩寵から出て、恩寵の生命をもつ働きをなす、之れ即ち恩寵の靈である。我等が神と基督を信じたる新しい精神の狀態は、アバ父と呼ぶ子たるものゝ靈である。そこに何の義理ありや。舊約聖書の神と人との關係は養父子の關係と見る事が出來る、即ち義父義子である。これは倫理的である、人の意志によりて父と子との關係を結ぶのである。新約に於けるこの關係は靈的親子の關係である。これは義理的父子の關係や自然的父子の關係を以てしては分らない。自然的親子關係は誠に美しい、けれども年と倶に薄らぐ憂ひがある。支那の孝子の模範たる大舜は五十にして猶父母を慕ふと云つて譽めてある。何人も必ず斯くあると云ふことは保證の限りではな

いが、之れはどうも年によりて厚薄がある。基督によりて示された神人の關係は自然的父子の關係よりも深く深くなつて、靈的關係である。靈界に於ける關係は永久につゞく。我等は永久に神の子として行くことが出來る。我に何物もなし、唯神の恩寵に浴し、常に神の子として行くのみである、これ卽ち恩寵の靈である。パウロが神の榮を望みて喜び喜ぶと云つたのは、此間の消息を云つたのである。

基督は人類の長兄である、基督の天の父の完きが如く汝等も又全くなるべしとの言葉、あれは強い戒めではない、兄が弟を勵す聲である、こゝに子たるものゝ祈願がある、又基督が「天の父は今に至る迄働き給ふ、我等も又働くなり」と宣ひし處には無限の意味がある。これ天地の悲慘苦痛の中にあり天を恨みず人を尤めず、奮闘するの原動力である。神を信じ基督を信ずる者の奮闘の力は實にこの恩寵の靈より發するのである。

△悲哀の原因

地方の都會では實業家として多少名のある者の妻君は十中八九まではヒステリー患者であるさうだ。これは地方に限るまいが、何故であらう、其原因は瞭かである。之れは夫が放蕩なるが故のみでない、日本の婦人はまだ〳〵夫の放蕩や亂酒には辛抱し得るのである。ヒステリーになるのはもつと深い處にある、夫れは人格と人格、靈と靈とが疏通しないからである。互の靈と靈が深い處に相通ずるものなきは實に妾を蓄へらるゝよりも、亂酒よりも堪へられぬ苦痛である。否實に妻なるものにとりては斷腸の思である。人間の中の一番の苦痛は靈と靈との交通の絕えたる時である。之れは親子とても絕えぬとは云へぬ、夫婦兄弟の間にも絕ゆるのである。所が靈の交通が續いてたえず流れてをれば、眞に愉快である。何とも云へぬ。現代の青年は運動も盛であり、衞生も發達してをるから體格は誠に立派なものであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

な。然しどうも元氣がない。又女子は今日舊來の婦人の享け得ぬ多くの自由を享有してをる。敎育と云ひ學問と云ひ、又其生活の狀態と云ひ雲泥の相違である、然るにどうも愉快そうにない。是等は何の故ぞや。之れ云ふまでもなく、天地の活ける神に其根底を結んで居らぬからである。神を愛するの强い精神がないからである。卽ち恩寵の靈の中に生活して居ないからである。

△神と共鳴する生活

我等は神の恩寵の靈を信じ、神と我と靈に於て疏通せねばならぬ。神の靈と我が靈と通ずる處、そこに悲哀もなく寂寞もなく、不滿もない。或人はそれを疑ふ。吾人其心事を思ふて氣の毒にたへぬ。父母を疑ふ子の精神狀態、天地の神を疑ふ人の心事、其悲哀さ、其不幸さ、實に言語に絶する。我等は神と共鳴せねばならぬ。神がなれば我もなる、天の恩寵の鐘が鳴れば、我心の奥も共に鳴る。互に相響き相應じてゆくのである。こゝに尊いものがある。この恩寵に生き、之れによりて働く、之を恩寵の靈に由れる生活といふ、人生之に優る祝福はないと思ふ。

◯

人の生活は美麗になるために
偉大なることを要せず
少さき花の威嚴ある木に於けるが如く
少さき寶石の大なる山に於けるが如く
少さき事にも多くの美麗なるものあり得るなり
甚だ愛らしき生活にして世の人の眼に
無意義に見ゆるものあり
美麗なる生活とは此世に於て
一の使命を完うする生活なり
そは神の聖旨に従つて存在し
神の命じ給ひし職分を實行することなり

ミラー

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

夏の祭

文學博士　姉崎正治

△人間生活を考ふれば不思議

我々が毎日生活する時「お暑う御座います」「お寒う御座います」と云つて、春が暮れば夏になり、夏が去れば秋風が吹き、やがて冬になる。かやうにして人間の出來なかつた時代から何萬年、何億年か、始終これを繰り返へして居るにも拘らず、この地球はなほ倦みも疲れもせずに、なほ同じ順序に廻つて居る。我々人間は長くても百年の壽命を保つに過ぎないが、人類そのものはづつと以前から生存して、四季の變化を觀察して居る。而して春を送り、夏を迎へ、また秋冬を過して、春には春の祭を營み、夏はまた夏の祭りを營んで居る。當り前であるが不思議である。どうして疲れないのであらうか。しかも例へば夏の祭りの祇園祭といふと、其處では年々歳々同じ事をするのみならず、祇園といへば日本全國大抵同じ時に同じ事を營む、否歐洲でも亞弗利加の內地でも世界至る所で夏の祭りといへば略ぼ同じ儀式、同じ材料を以て營んで居る。畢竟これは四季の變化が同じで、その四圍の境遇に從つて人間の心持がうごき、その生活狀態が變るから同一の祭りをするやうになるのである。

△祭とは如何

元來祭とは如何といふに、時候に應じて、植物の靈を祭ることが多い。それは我々の祖先は太陽が天空を驅り、月が缺けたり、植物が繁茂し、實を結ぶその生命の力の源には何か靈があると感じた、即ち天地萬物には靈があるとした人類の元始の信仰がそのまゝ祭に顯はれて居るのである。この信仰は科學の進歩と共に一時破壞されたが、今日はまた生物學者、化學者、物理學者に至るまで、萬物に靈魂あるを說き出し、生物學者は細胞にも靈ありとし、また植物學者として名高きフエーフイネルは「植物の花の靈」といふ書物さへ書き、植物心理學といふ名さへ出來るに至れりといふ有樣で、今日の世界觀は祖先の信仰に戾つて居る。然し我々の祖先は萬物に靈のある事は當り前の事とし、蝶一つにも深き同情をそゝぎ、無益に殺生する事なく生活して居つた。それ故春になつて初めて萠黃の美しい芽が出で、次第に鬱蒼としてこの天地を飾つてくれる草木の繁茂を單に見過す事は出來ず、それ等植物の成長を祈ると共に、安穩に生活して居る草木の福を分ち、植物と人間と共に天地を造らうと願ひ、それを何かの方法で表はさうとしたのが、即ち祭りである。それ故祭は我々人間が天地の中に萬物と共に生活し、共に憂ひ、共に喜び、人間の模倣性によつて其の植物の靈に模倣して芝居にうつのである。

△芝居の起元

芝居といふ事を一言すると、芝居は元來祭から出て居るので、祭りの時する御神樂は芝居の元祖である。これは畢竟神樣のする事を人間がやり、之れを見たものが同じくその力を貰ふといふ意があるのである。夏の時鬱勃たる植物の成長の力を芝居にうつして見た祭は、我々の祖先が初な心で、草木も我々人間と同様の魂があると信じた信仰で、それが長く殘つて、今日も尙年々歲々行はれて退屈せず、神輿が出れば子供が喜ぶ計りか、若衆も、年寄も夢中になつて喜ぶ。祭りは子供の時代の信仰と行事が殘つて

居るのである。今日自動車が馳り、電線が網のやうにかゝつて、神田祭の山車が昔の様に高く出來ぬといふが、今に殺風景の電線が地下を通る様な明治六十年頃になつたら、またまた山車を高くする時代が來るであらう。三つ子の魂百まで〻人類の子供の時の事を忘れぬやうに、今日もなほ祭が行はれる、我々も子供の時代の事を追懐すると一種の極樂である。今日の文明は功を經たへんてこな文明で、それ故社會主義だの、ストライキ、盗賊等が盛んに行はるゝが、なほ人間は昔のやうな考への祭りを繰り返へす事を喜んで居る。明治維新後一時理屈を云つて祭を廢したが、今日はまた復活した此處に人間の衰へぬ力がある。子供の初な活潑な生氣を慕ひ、これを人々の上にうくる祭の元始の意味を尋ね、その内に新らしい意味をつけるのも大切である。

△祭は摸倣

そこで我々は如何なる祭をするかに就て調らべて見ると、大體に於て眞似である。猿が人眞似する計りでなく、我々お互ひは眞似をし合つて居るのである。世の中の流行も人眞似である、彌次馬は最も眞似をする性をよく發揮したものである。祭とか咒とかは眞似が大部分を占めて居る。これは偶然ではなく、根本の信仰が然らしむるので、獨り人間同士計りでなく天地萬物の靈と互に助け合つて生きて居るのが人間の生活の極めて自然なものである。然るにこの頃は社會や、人間に反抗して、孤獨の生活を無理に營まうとするのを自然主義と呼ぶが、これは自然に反するも甚だしいもので、非常な不自然主義と云はなければならない。人と協同して生活するものを厭ふならば、人間を辭職したがよい。人間の生けるは、天地萬物のお蔭を蒙つて居るので、空に輝く日も星も我々の仲間であれば、花も蝶も仲間である支那の莊子も、夢に蝶々になつて、醒めて、己れが蝶になつたか、蝶が自分になつたかと惑ふたといふ我々の仲間といふ考への中には、もとその間に融通のある事を語つて居るものである。例へば慧星が出づるのは昔は人間に何か警醒を與へる爲めだと思つた。春になつて花の咲くのは、春の天地と自分と共に樂しむと思つた。そこで眞似をすればそれによつて助けを得らるゝと信じた。今日人の留守中影膳を据えるが、百里先きの人が、それを食べる譯ではない。印度に或理屈ぽい人があつて「死んだ人に食物を供へるが、天に生れた人に食物が屆くのならば、下に食物があれば二階の人の腹が滿つる筈である」と云つて居るが、さやうにして直接利目があるといふのではないが、一種の信仰である。昔の眞似は幼稚なもので、雨乞ひ——これは安南の風俗である——には太皷を叩き、村の一番の年寄りが樹の上から杓子で水を注いだものである。これは天上から雨を降らすのを促したもので、かやうに眞似をすれば天地も共に變化を起す事が出來ると思つたのである。又或地方では雨乞ひには黑毛の馬をあげ、晴れを願

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ふには白毛の馬をあげた。黒は雲に真似び、白は日になぞらへたので、これ等は稍抽象的になつたのである。

△端午の節句

そこで夏の祭は如何。就中著しいものを擧げてお話して見やう。日本には夏の祭は甚だ多いが、その始めは端午の節會である、之れは支那から渡つて來たものであるが、夏當さに酣ならんとする時に、その草木の盛んな靈を人間に受けんとしたものに外ならぬ。それ故草木が重になつて居る。菖蒲、蓬、柏ちまきを取れば、端午の節會には何もない。これは丁度夏になると共に、これ等の草木の靈を家に招待し、愛護する意味である。昔程節會にはこの草木を多く集め、奈良朝の頃は、家を飾る計りか、身體をも飾つたものと見へる。朝廷に出仕する人が日かげのかつらを纏ふて出づるなどいふ事が書物に見えて居る。五月五日は家も人間も緑の着物をつけ、天地

に益々草木が繁茂する時、人間がその靈を代表して表はれ、その生氣を一層盛んにする。其處からいろ〱聯想し、その日に用ひた蓬と菖蒲とを藥にしたり、またその日に蓬の湯に入れば疫病にかゝらぬといふ。節句に菖蒲を軒に挿すは、家に惡魔、疫病が入らぬやうに保護するといふ考へらしい。また屋根に菖蒲を載せるのは、夏の初め雷が落ちぬやうにとの咒ひであらうと思ふのは、外國では植物を屋根に上げると雷避けの咒になると云ふ事があるからである。ちまきと柏とは草木の盛んな靈を代表したもので、柏は歐洲では非常に大切なものになつて居る。現代では柏を只勢よきものとして居るのみであるが昔印度と歐洲とに分れた人種は、柏を神様の中で大切なものとした。歐洲では柏を燃して作つた火は疫病避けになるといふのである。またちは日本では何時も疫病避けになつて居る。ちの木の花は惡魔避けになるといふ。それを食べるといふのは、その草木の勢力を人間につけるのである。支那ではちまきを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ツレと云ひ、五色の糸で縛る。五色は恐らくは五行の木火土金水の力を籠めたのではないかしらと思ふ

端午に用ゆる草木はかやうに勢をつけるものであるところから、日本では徳川時代には自然男の子の祭となつた。その少し以前足利の時代は端午には人人が草づりの着物を着、緑の幟を建てたといひ、享保の頃は青い色の太刀を作つて、市で戰ごつこをしたなどゝいふ事がある。此の頃から男の子の祭となつたのである。今日では節句に鐘馗樣と大將人形とを飾るが、支那では鐘馗樣だけを飾る。鐘馗樣とは云ひ傳へによると或る進士で、試驗に落第して、悔しがつて死んで、それで世間で祭るやうになつたので、これは人に禍をする小さい鬼を護るといふが、私はこれは或は植物の靈を型取つたのではないかと思ふ。日本では鐘馗をもその儘にして居るが、これに武將の力ある者をも添へて祭るやうになり、單に時候の祭りに止らずして、英雄崇拜が加はつた。

△御靈會

もう一つ夏の祭として六月の御靈會に就て申して見たい。御靈とは疫病の神樣を祭つたとも云ひ、或は橘の逸成を祭つたとも云ふ、その中で著しいのが、京都、但馬である。初めは越中がもとで、その後至る處に傳播し、祭りの儀式にもいろ／＼あるが、茅の輪を潜るだけは何處でも同樣である。尤も但馬の方では丸い輪の代りに、蛇の形に作り、宮司が劍を持つて、三度飛ぶ、祇園では山車、山鉾がある。鉾も植物の靈を代表したものである。其始めは棒の先きに植物なり、花なりを付けて持つて歩いたものが次第に鉾になり、人形になつた。今日では本尊は聖德太子であるが、もとは植物の靈を祭つたものである。

△ヨハネの日の祭

夏の祭としては、花しづめの祭、大祓の祭、五月

の節句、御靈會等がある。更らに西洋に於ては復活祭から七週目にペンテコステの祭があり、ヨハネの日の祭がある。これは中夏の日で、大抵は六月二十四日に當る。いろ〳〵の人種、種々の儀式でやるが、中心となるは、或る一種の植物の黄色の花を用ゆる。黄色は日の光を代表する、傳説によるに、ヨハネの日の正午――即ち夏至に當る――寺の鐘がなるその鐘の鳴つて居る間に、山に行き植物を堀り、その根にある炭を取ると、何の魔術でも行へるやうになると云ふ。西洋では Witch 即ち女巫を非常に恐れる處より、或所では女巫がその炭を取らぬ中にといふので鐘を半分叩いて止めて終ふ事がある。これは畢竟中夏のしかも正午、天地が生氣に充ちて居るその強い力を人間が受けて之れを用ふると同時に、女巫が取れば、之れを用ひて一層魔術を欲にするといふ恐れがあるからである。(未完)

枕頭の暗

日高沈聲

○

更けてゆく上野の夜の鐘さえて枕頭の暗久遠を告ぐる。

○

靜默の一日は暮れてうす明かき瓦斯の光に我影寂し

○

枕頭の達磨大師をころがせば悟顔して又起きて來る

○

音もなく香もなく消ゆる日を戀つ、惑ひの雲に包まるる身は。

○

雨の音淋しき夜なり君思ふ心泣くかな故郷の家。

○

故郷に我をまつらむ君かゆめ今日も安かれ明日も明後日も。

○

故郷の思ひ出しげき此夕心くたけて君を戀ひぬる。

其の後の金森家

記者

本誌前號は金森小壽夫人の逝去を痛み、記念の爲め、諸家の追懐談を掲げました處、讀者諸氏からも涙と共に幾度か讀んで、其の高風をお慕ひ申して居るといふ懇書を寄せられましたが、殊に金森氏は、親戚知友に本誌を頒たれし處、その後諸方から氏の手許に百餘通の手紙を寄せられ、いづれも故人の徳を更らに忍ばするものありと伺ひて、夏草のしめやかに匂ふ或日の午後、千駄ケ谷のお宅に伺ひました。良人通倫氏は一束の書翰を携へて、應接室の椅子に倚り「何れも〳〵私を慰めてくれやうとて、よほどしみ〴〵と書いてある」とて記者に示されました。

室の一隅に置かれたオルガンの上には、亡き夫人が幼き九郎ちやんに頬ずりして、ニツコと笑まれて居る寫眞が掲げられてある。「ア、お寫眞が」と見上ぐると主客は今更ら淋しく打ち沈まるゝのであつた。やがてとぎれ〳〵にこんな話が語られる。

◎　◎　◎

その後我が家では八人の子供が皆机上に母の寫眞を据え、部屋毎にも皆額にして寫眞を掛けた。精神上にはもとよりであるが、形の上にも終り迄母をそこの家から離さぬつもりである。小さい子供等が惡戯をすると、兄姉は寫眞の前に連れて來て、「そんな事をして母がお喜びなさるか」と云ふと、「大變惡かつた」と云つて直ぐ改めるといふ風である。今後も子供等は母の名によつて敎育する積りである。

　六つの九郎も時々思ひ餘つて「母が居るといゝナ」と云ふので、「母は此處に居らしやるぢやないか」といふと、「いゝえお墓の母がサ」と申します。此間も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

「お前の一番好きなものは何か」と何氣なく尋ねると「僕の一番好きなのは母で、それからお三壽姉さん、それから二郎兄さん、それからお饅頭」と申すのです。やはり母の事が幼な心に瞬時も忘られぬと見えます。

二三日前私が初めて妻の夢を見まして、起きてから父は昨夜母の夢を見たよと申しますと、八つになる鈴江が「私も見たいな」と申すのです。まだ母の思ひ出を語る程にも皆の心からは離れて居らないので、歴史的に母を語る事はありませんが、皆の心に滿たす事の出來ない缺陥があつて、どうしても物足らないのです。

客の心は慰めやうもなく只沈んで行く、裏の流れがゴウ／＼と響いて、庭の木立にわびしい風が吹く。「眞に火の消えたやう」「太陽が照らぬやう」と心にさゝやいてまた冷たいお寫眞を仰ぐ。やがて記者は書信の二三を拜借して、暇を告げた。靈の夫人が御一家に一日も早く復活せられん事を祈つて止まない

左は親戚知友の方々の手紙の一節であります。

○

先日天國に歸られましたおば樣の御かたみ、只今有り難く拜領致しました。雜誌新女界の妻小壽の處、今朝から夕方迄讀みつゞけて居ります。母を失ひきれぬのが、どうして九人の子供ばかりでしやうかと幾囘か立服。(記者云ふ、此方は氏の家に久しくありて、夫人をマヽ／＼と呼びて居られし由)

私は妻と共に毎朝毎夕二回之れをよむ事にしました。

モー何も申上ませぬ。御禮迄一寸申上ます。

○

「前略」毎日／＼御尊家の將來と申す問題に就ての考への起らぬ日とては一日も無之候へども、如何なる事か、どうしても名案出です只今獨り考へ込みては御一同樣の御心事を推察する計りに止り申候今後恩師には如何計り御不自由遊ばさるゝ御事かと、是のみ心配に不堪候。………… 新女界と申雜誌御送附下され、正に拜受、此頃は何から何迄恩師の御筆にて、雜誌の帶紙までも御認めのことを見、眞に／＼感涙仕候、又拜見してどうしても涙出で、讀了致し難く候小生拾年以上親子同樣御親交を辱ふしたるより、さても／＼涙の方が先に立ちて堪へられず、大に元氣を出して翌六月七日朝祈拜後家族一同の前にて拜讀、遂に讀了は仕候へども、私は泣き乍ら讀むこ

さゝて、一同も共に泣き申候。眞に／＼御高德今更ながら敬服にたへず候。「後略」

○

「前略」日を經るまゝに私事も段々眞實の如く思はれ候につけても、此世に力ある友たり、師たり、姉たりし方を失ひし悲みいや増し申候。氣分よくならば紀念に、わが心の紀念に、どうせ遊び居る身の御奥樣の小さきわが目に影じたるさまん＼の事を書きつゝり度く心がまへいたし居申候。

先夜は丁度かゝる事また思ひ煩ひ居候折柄、新女界御送り下され一人涙にくれ申候、讀み終りて一同を集めて聞かしめ、女中共にも讀みては語り聞かしめ、悲しみをわかち申候ひしが、御主人樣の御言葉はさても／＼讀みゆかれず。幾度か中止しては又心さり直し、涙抑へて讀み聞かし申候。此の世に一人にても多く大なる御德、御力にあやかりて立つ女子のあれかしさ微力ながら人々に傳へ申度、かくて私の心に一しほ強く穿ちたく存し居申候。

○

「前略」死別は誰さて悲しまぬ者はこれなく候へども、最も貴き御奥樣、總てを充分に御盡し遊ばされて尚餘りありし御奥樣を御送り遊ばす先生の御心は更なり、最も賢き御母君、充分教養せられて尚餘りありし御母君さ別れ給ひしお子樣方の御心中さこそさ御推し申す胸ふさがる心地いたし申候。あゝ最も敬重しかつ最も信賴したる母たり、姉たり師たりし小崎先生を遂に御送り申す此身、誠にかなしく、いかにも堪へがたくて昨夜は心の痛みの餘りに切なかりし為、筆さる事もえ仕らず候ひし。思ひかへせば小崎先生に始めて御目にかゝりしは、明治三十五年の三月、お茶の水のなつかしき母校に於てなりき。それより以來十年餘の間春風の如き温き御情けによりて、弱き此の心を勵まされ、且つ慰められし事幾度か、又かの賢き御才力によりて狹き此心をひろめられし事幾度なりしか。あゝわが母君、わが姉君、わが師の君。

今より三年の昔、大雨をおかして、温き御心もて新橋に此身の西行を御送り給ひし時は、あまりの有難さ、嬉しさに照る日のそれにも勝る感いたしたるを、そは此世にての最後の別れなりしかさ思へば、それからそれへさ心はうつりて愈々なつかしくいよ／＼悲しく相成候。あゝ天は何故に女の鑑、妻の模範、母の業なりしわが小崎先生をかくは早く召し給ひしにやさ、無理なる事迄申度相成候。然し靜かに默想すれば小崎先生の凡ての言行は皆その地上の人たらざるを證し居り申候。幾度くりかへし候ても殘り惜しく、悲しさはつきず候へども、人の力の及ばぬ處に御座候まゝ、御一同樣折角御諦りなく、小崎先生の御志を繼ぎ、且は御亡きあさを御弔ひ下さるやう祈上候「後略」

○

「前略」私共も同じ心に其の後は夢見る如く日を送り申候。時には泣き、時には戒められ、寸時も忘るゝ事なく、苦しき中にしもまたそれが爲めに心に纏れ申候。はからずも過日は清き雜誌の御惠みに浴し有難く嬉しく、繰り返へし〳〵拜見致し申候。中ば以上先生の御高德によりて滿されたるこの清き雜誌を拜見いたすにつけても、如何に世の多くの人の先生を失ひし事を痛み居るかを察せられ申候世の凡ての人先生の御話を一度たりとも御伺ひ申せし人は勿論、先生の御尊名を拜聞せし人は、この凶報に接し如何ばかり慨歎いたし居るかを察せられ候。失禮かは存じ申さず候へども私共先生の御話を御伺ひ致しても、其事柄に至りては必ずしも耳新らしきものとのみは存じ申さず候。されど先生の誠心誠意、眞の愛情より湧き出づる一言一句は私共をして云ふべからざる力を與へられ申候。初め第一回の御話を御伺ひ申せし其時既に大に自信を與へられ申候。それまでは自分が教師たる位置に立つ事の甚だ不安なる事を感じ居り候ひしも、たゞ一回の御話によりて大に自信を抱き申候。さればとてこれ決して教師たる人にのみ與へられたる特別の御話にも御座なく、たゞ一般の御話に候ひしかど私共の心の何物かにふれ申候事は實に〳〵申上ぐる事能はざる程に御座候。學校の往來に私は友と共に自信を與へられたと語りし事幾度もこれあり候。……………先生は私共に取りてたゞ一時の先生にあらずして一生の先生と深く深く感じ居り候ひしを、あゝ私共は實に行く先きの光明を失ひし如き心地致し申候。されど〳〵決して先生は眞にゆかれしにあらず其御精神は永久にゐまして私共を御支配下さるものと信じ申候。私共は先生の御話の肝銘せられしもの苔むす時に相成候とも御違ひ申すまじくと固く御誓ひ申度候。

先生の御話下されし御事凡て申上げたきは山々に御座候へども先生の御話を承る其時は御前にて筆記など致すは、何となく失禮なる樣の心地致し、御話の終りて後、たゞ自分の戒めとのみのし置きたるもの御座候。されどこれは自分にて見れば千萬無量の意味含まれ申候。……………思は胸に滿ちてはりさけん計りに候へども、表し方拙きため心にもなき失禮なる事申上げたるかも存じ申さず候何卒あしからず御許し下され度偏に御願ひ申上候。

早く御禮申上ぐべき筈の處、園藝部にて養蠶致し居、丁度只今上り際にあたり、晝夜忙しく失禮いたし申候。本日は漸くかたづき候ひしため、生徒にこの雜誌によりて話きかせ申候ひし處、生徒も大に感じたる樣子にて、歸らざるを無理に歸へし、自分一人室に入りてこの手紙認め申候。「後略」

話し方の研究（其の二）

久留島武彦

△聲と咽喉と呼吸と

次には話しに扱ふ道具調らべをしたいと思ふ。その道具は手足（態度）眼、材料、聲等に渡る。元來日本人は聲に關聯して、よく咽喉といふ事を云ふ。あの人はいゝ咽喉だ、たしかな咽喉だと云ひ、從つて咽喉は大事にして、毎朝鹽湯で含嗽するとか、大阪で出來る大音聲といふ藥を飲むとか云ふ。然るに不思議な事がある。一度日本を離れて旅する者は、船の食堂の演手は勿論、歐米至る所に聲を扱ふ商賣をして居るのは皆伊太利人である事を知らるゝであらう。その伊太利に斯樣な諺がある、咽喉を知らぬ（有たぬ）伊太利人と。世界中に聲を扱ふ國民が咽喉を知らぬ伊太利人とは何か。何故に伊太利人が咽喉を左樣に重大に考へぬか。然らば聲には何が大切かといふに、彼れ等は咽喉の代りに呼吸を考へるのである。これは實に眞理のある事で、聲は咽喉で扱はれぬ場合がある。家に赤兒の生れるといふ時、そら火事よといふ時、よく人は大聲を出すものである。自分では決して大聲を出さうと思ふのではないが、自分が一を出さうと思つても、呼吸がはづんで肺の中から八も十も出て來るので、不知不識に大聲が出づるのである。之れを以て見ても、聲を扱ふものゝ凡てが咽喉でない事が分る。それ故聲の爲めには强き肺臟と、之れを調節する習練を考へる事が大切である。自分がいろ／＼の聲の程度でいふ聲の高さと出す呼吸とがつり合ふやうにする、こゝ迄の用意が大切である。次に話す聲に就ての注意を述べやう。

△聲の扱ひ方

第一は低い聲で話す經驗が大切である。之れは重大な實驗である。下手な人程高い聲を出すのが普通である。我々も何か話さうと思ふと、遂或程度より高い聲になり易い。それ故成る可く低い聲で合點の行く樣に試み、話して居る中高くなつても、時々低くする經驗をしなくてはならぬ。高くなつた時、聽き手の注意が惹かれて居ると見たならば、聲を低くして見る。それで一分でも二分でも注意を惹けば、更らに深く捉らへた事である。これは次第に熟練を要する。江原先生が昔傳道をして居られた頃は、隨分拙なものであつたが、今日は子供の會合であれ、婦人の會合であれ、政談演説であれ、行くとして可ならざるなしといふ有樣になられたのは、實に千練百磨の結果と見るべきである。

次は話に間を有つ經驗が大切である。講談師の話を聞いて居ると、間、髮を入れざる事を間を有つて立派に聞かせる。下手な者は早い事は早く話さぬと捗取らぬと思ふが、段取りさへよく行けば、追かけ追かけ後から行く想像を妨げぬ範圍に、出來る丈け順序を追ふて話す事が出來る。

第三は調子に乘せる事で、云ひ換へれば音樂的、旋律的であれといふのである。同じ三時が鳴つたといふにもチーチ、チーン、チーイヌ、ア、三時が鳴つたと、一寸した音樂的の餘裕を取れば子供の想像を助ける事になる。然し物の聲を模倣るといつても餘り現實になり過ぎると、話す者の品位を傷ける。

第四は聲を自由に持ち回り、場内の自由の處に落す稽古をする事である。オーイといふ聲一つで、左右、上下の位置、場所の關係を知らせる事も出來るが、それ斗りではなく子供の統括上に殊に必要である。あの柱の影につゝき合ひして居る子供が居ると思へば、オーイとその子供の所に聲を持つて行つて落すと、びつくりして行儀を直す。かやうな事は實驗を組み込んで行く必要がある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

△言葉の扱ひ方

今一つ進んで言葉の扱ひ方を申して見やう。一體言葉は直截の事、明確、簡單な事、この三つの特質を持たねばならぬ。そして努めて具體的な言葉を撰ぶ事が大切である。もし具體的でなければ、耳から直ぐ聞く事が出來ず、理解に手間取り、記憶もしにくゝなる。「向ふからお孃さんがさも悲しさうな風をして來ると、いかにも可哀さうだと云つて」と云ふよりも「向ふからホロホロ涙をこぼして來ると、孃や此方にお出でと云つて、手を執つた」と申す方が聞く者の心によく泌みる。子供には大人よりも、婦人には男子よりも具體的に話す必要がある。通俗講演で評判のいゝ新渡戸博士、志賀博士などは、いつも話が具體的である。平民の福音を傳ふるには、天下一品と云はるゝ山室軍平君の如きは、徹頭徹尾具體的で、きのふあつた事、今電車の中であつた事がいつも材料になつて居る。この間同君の話の雜誌に出て居たのに就て調らべて見ると、二頁半の原稿中事實を引いてあるのが十一で、抽象的の言葉の一番長いのが四行半であつた。一般の人々にも具體的なる事は大切であるが、殊に子供には具體を失へばだめである。子供には形容は不必要で、形容するなら具體的にしなければいけない。

次に固有名詞は考へなくともよいが、普通名詞や動詞形容詞を考へなくてはならぬ。富士山、天龍川等いふのはよいが、蛙とか、猿とか、きもの等といふ普通名詞は地方至る所で變つて居る。蛙の事をガアエルだの、オンビキだのいふ地方がある。私が或地方に行つて、蛙の話をしやうと思つて、話す前にこの土地では蛙の事を何といふと聞いて、さて壇に起つてその通りガアワズ／＼と話すと、後でガアワズとは何の事かと聞かれた、變だなと思ふと、此地方ではガアエルといふと先きに教へられたのを覺え違つて、ガアツズと云つて話したから、解らぬ筈であつたのである。餅搗く音でもボテン／＼と云ふ處

も、ペエチヤラコ〳〵といふ處もある。これは別の事であるが、地方で話しする人は、オチヤピーとオベヽといふ言葉は決して遣つてはならぬ。これは或地方では云ふを憚るものゝ事に用ひられて居る。その他動詞でも動く事をいのくといふ處がある樣に、隨分地方によつて異つて居る。

次に叙情的の事を云ふ時の模聲は、どの程度迄出したらよいかと云ふ事を考へなければならない。話す人が泣き眞似して見せる時、泣けば泣く程却つてをかしさを覺ゆる事がある。然らばどの程度迄模聲したらばよきかといふに、丁度興言の太郎冠者、次郎冠者の科白のやうに、一尺話すならば、初の一寸は向き合ひ、八寸を皆に向つて話し、また終りの一寸を向き合つて云ふといふ風に、初め一寸眞似て、次に通常の言葉で話し、また一寸模聲を出すといふ風に、眞似と説明とチヤンポンにするがよい。物眞似をする事は實感を得るたよりにするのであるが、何處迄もするならば、それは芝居になつて、一人にして百藝に渡らねばならぬやうになる。話すには自分を握らなければならぬ、話す時甲となり、乙となり終るのは下手である、この模聲が足りなければ同情が足らず、多ければ品位に障る。

言葉はまた務めて不必要なものを用ひぬ工夫しなくてはならぬ。よく人はソーシテとか、ソレカラとか、アノ、ソノ、ソースルト、コノと接續詞を使ふが夫は想像を破る事甚しい。殊に日本人は百人が百人エーといふ事をよく云ふが、之れは斷じて避けなければならぬ。そして出來る丈け少い詞で、出來る丈け多くの効果を得る工夫をしなくてはならぬ。

子供に話すといふ時、人は敬語を多く用ふる、兎さん、鹿さんと云つた風に云ふが、之れは不必要である。幼稚園邊りの子供には多少必要があるかも知れないが、多く入れぬ方がよい。また前に云つた言葉を後に生かす工夫が必要である。「向ふから三郎が二本鼻を垂らして來たかと思ふと、鼻をふき〳〵なんだこの野郎と云つた」といふよりも、「向ふから三

郎がやつて來たと思ふと、一寸横撫でして、なんだこの野郎と云つた」といへば、三郎の人格も少い言葉の中に自ら分る。フイリツプス、ブルクスの云つた言葉に「話は出來る丈け明瞭なる事、論理的なる事、快活、眞面目なる事、佳調なる事」と眞にその通りである。會衆が多い丈け、混雜する丈け、言葉の云ひ切りをはつきりする事が大切である。

△話す態度

前號に於て話す態度よりも精神が大切であると申したが、然し我々は自由な手足ある以上、之れを粗末にしてはならぬ。日本の演壇に立つ人は百人が百人手を後ろに回す。之れは休めの姿勢で禮儀に於て失禮である。西洋では二時間以上演說した時、初めて椅子による事を許さるゝ。もし手が疲れたならば、一方を後ろに回して、代り代りに一方宛休めるとしても一方は必ず前に出して居る事が禮である手はどんなに使つても品位に拘らぬが、足は品位、貫目を代表するもの故、殆んど或程度迄動かす必要はない。腰から下は丁度角力取りが土俵で占めた地歩と同様、ウンと氣張つて動かぬがよろしい。手も出來る丈け少し動かして多くの意味を語る工夫をしなければならない。柳屋小さんが嘗て旦那と召使ひとの違ひをあらはすには、僅かに一寸肱を張るか、附けるか、また膝の手を一寸後に引くか前に出すかにある。卽ち肱を一寸張り、膝の手を一寸後に引くと旦那の姿勢になり、その一寸の肱を付け、膝の手を一寸前に出すと召使ひの態度になる。誠にづるいものであると私に話された事がある。然し初めからづるく構へても容易でないから、先づ思ひ切り使つて見てから、骨を悟る方がよい。全體の姿勢は成る可く反る方がよい。前に曲むのは半分聽衆に呑まれた調子である。

△眼卽ち精神

扨話しする者に取りて眼程大切なものはない。手

足を動かさなくとも、眼一つで旦那にも召使ひにもなれゝば、有るものを無い樣にも、無いものを有る樣にもする事が出來る恐るべきものである。この話には意味があるぞといふ事は、口でどんなに笑はせても、手足でどんなに狎戯けても、眼できつと知らせる事が出來る。檢校の琴彈きは、聲が何やら徹底しないといふのは、その大切な眼が塞がつて居るから、意味をあらはすのに、薄紙をしひた樣な感があるのである。扨眼を使ふ土臺は何かといふにそれは精神である。態度、音聲はいかに立派に出來ても、眞面目を缺けば、決して話しの意味の徹底するものではない。講談師の話が徹底を缺く事の多いのは、眼によらずして口によりて話すからである。エール大學の雄辯學の教授クレーム氏は話につき自分の經驗を問はれた時に、第一同情、第二同情、第三同情と、卽ち聞く者に同情し、己れに同情し、材料、場所、時に同情し、同化し、渾然一にして己れとなり同時に己れを忘れて他の己れになる事が大切である

私共が地方に招かれて話しに行くと、二里も三里も山越え、里越えて、態々聞きに來たこの子供に、どうか同化し得る樣に、そして何物かを與へる事が出來る樣にと十分計り凝然子供を見て、後控室に歸つて默禱するのが常である。かうして話にかゝると大抵効果を收める事が出來る。之れ卽ち子供と充分同化する事が出來隨つてその精神を徹底せしむる事が出來るからであるが、不幸にして控室に縣會議員や知事が居つて、靜かに考へる暇もなく、また話の前に充分子供に同化する事が出來ない時は、いつも失敗するのである、話す者も前以て用意をする事が大切であるが、何も話を依賴して、之れを多くの子供に話して、何か益を與へて貰うと思ふ方でも、話し手に對して、相當の用意せしむる時間を與ふる樣に心得る事が大切である。（完）「文責記者にあり」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

婦人世界

七月一日發行 七卷八號 一冊 拾五錢 郵税一錢五厘

◎皇太子殿下の行啓を忝うしたる我が社主催全國小學校成績品展覽會

△淺ましい海水浴場の婦人の風俗……下田歌子

△草鞋を作って働く百九歳のお婆さん……福原有信

△婦人の心得べき妊娠中の注意……岩崎直子

△馬鹿息子……高木敏雄

△育兒の心得……加藤博士

△衞生と迷信……くれたけ

△床しき謝恩會……婦人記者

△中元の贈物……國分操子

△時節柄の衞生……鈴木主人

△殘飯の始末……婦計記者

◎歴史講談 春日の局……細川風谷

◎滑稽百話……

小說「子寶」……村井弦齋

◎手紙の形式……渡邊白水

◎夏の野菜料理……櫻井ちか子

◎婦人と芝居見物

高木鎌子
宮田脩
磯野吉雄
海老名みや子

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 郵便振替貯金口座東京參貳六番

第三卷 新女界 合本

残本僅十數部　定價金壹圓（送料共）

◉社説　（安井哲子）

▲死ぬ迄働き續ける元氣▲無意識の感化▲個人の歷史▲奮鬪と慰安▲他人の喜びに對する同情▲趣味のいろ〳〵▲過つて改むるに憚る事勿れ▲懐かしい十年前の夏▲溫情▲勇氣▲犠牲の精神▲心の準備

◉講壇　（海老名彈正）

▲現代婦人の缺陷▲永遠の生命▲恩惠の聲▲柔和の福音▲誤解せられたる基督▲女子の解放▲愛苦の眞義▲神の聖愛▲向上の動機▲基督の家庭▲基督教の眞髓

◉想苑

▲新らしき生活　谷津博士
▲現代女學生の惡傾向　小此木松子
▲禮義の根本觀念　三谷民子
▲亞米利加だより　海老名一雄
▲かあやん　德富健次郎
▲現代小說雜誌　小山東助
▲湯臺叢話　谷澤直秀
▲獨逸見聞記　吉野作造
▲婦人解放の是非　宮田脩
▲佐久間大尉の手紙　德富健次郎

▲矯風問題　島田三郎
▲女子の教育の標準　村田勤
▲婦人の活氣　小此木松子
▲伊香保より　野口精子
▲形式道德の無能力　村田勤
▲土耳古の話　小松武治
▲惠み多かりし二夏　三谷民子
▲夏の巴里　藤島武二
▲西班牙の夏　湯淺一郎
▲常樂の生活　二宮貞子
▲子女教育に對するの母の務　海老名みや子
▲婦人と信仰　海老名彈正
▲「アンドリヤ、デルサト」を讀みて　三谷民子
▲無題錄　小此木まつ子
▲女子の高等教育論　ジョルダン博士
▲我國女子の將來　成瀬仁藏
▲婦人解放問題　内ヶ崎作三郎
▲男女問題の意義　安部清藏
▲淨心錄　谷澤直秀
▲世界最大の美　宮川經輝
▲文欄▲家庭▲雜俎▲衞生▲隨感▲其他種々

彩虹庵を訪ふ

野口精子

彩虹庵――それは近頃海に飽いて漂然として憬れて來たといふ有田畫伯が上野の連山を抱いて美しい夢をほしいまゝにしたまふところである、三年の山國生活はたゞ徒らに海へ〳〵と狂ふ日もある私が、此頃は「山の戀ひしき」など歌ふ日もある樣になつた

今日は〳〵と日延をした、最早だましたとやら形にはまつた生活が惡いとやら、さん〴〵の御便りに足もとが浮いて心が飛んで居るのも久しいもの、かうしてだん〳〵延びて行く內には色々な慾が着纏ふて仲々さう山の仙人が翼で飛ぶ樣な輕い氣持になれぬ、晴れた日の赤城も見度いし、卯の花降しのしめやかな物語りも妙だしなんど〳〵一にして二も三も得たいとまで思つて見る、此度の月曜日には大した故障のない限り必らず參りまするると思切つて端書を出した、

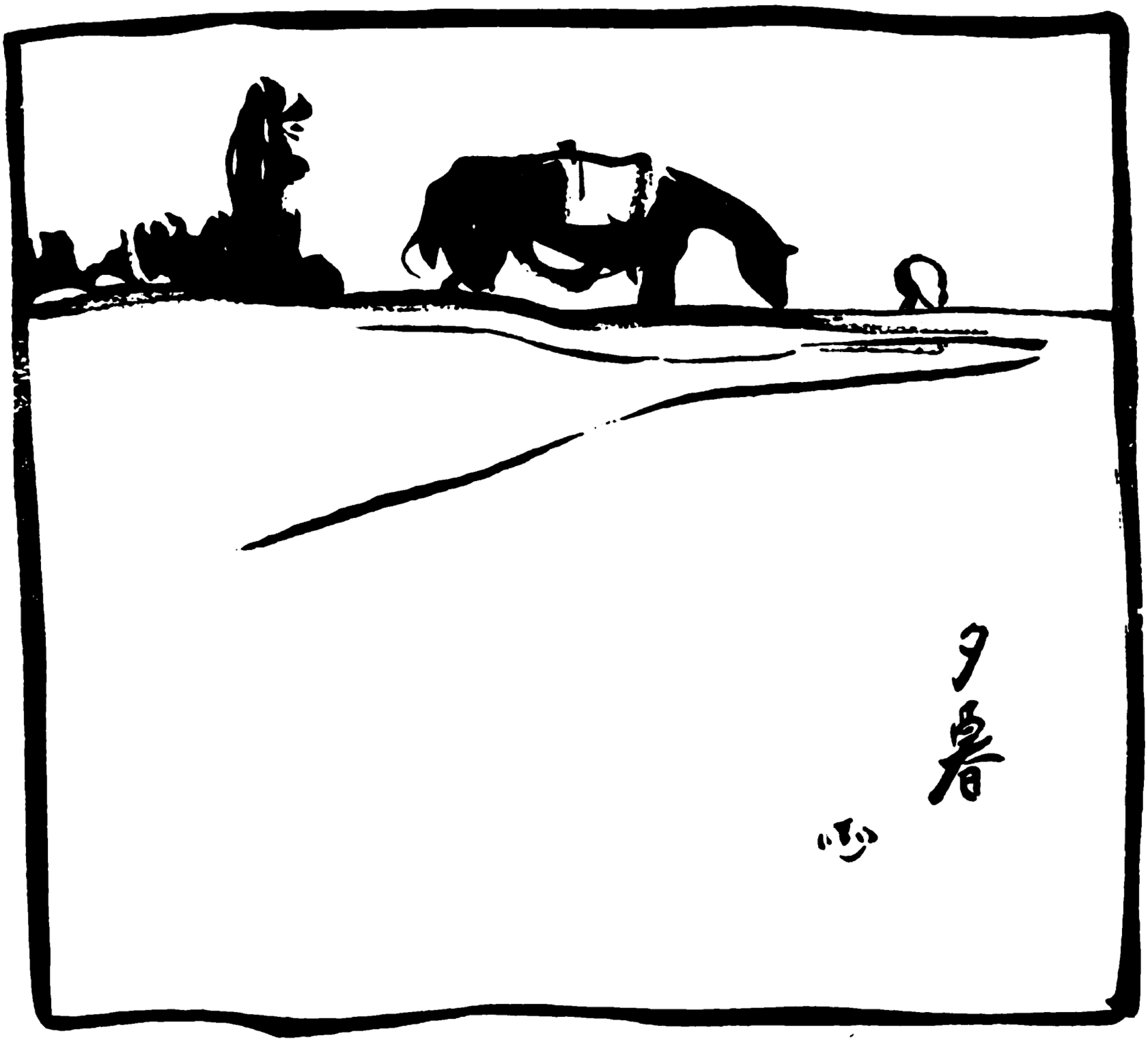
夜が二つ明けて其日となつた、雨がしと〳〵と降つて居る、それのみなら迷ひもないが、折々雲が切れて光つたものがさし込んで來る、お天氣になるかも知れませぬといふ聲も聞ゆる、山は裾の方丈けを見せて雲の冠りをして居るけれどもそれもだん〳〵取れる樣だし極めた通りに行き度いと思ふ心が五分それから子供に今日は澁川の有田さんの處につれて行く、そして螢を貰つて來ましようといつたら何も蚊もよろこび紛れて朝の時を幼稚園に走つた、それで又行く方に三分の保證を取つて置く、空は依然として雲重く時々もるゝ光りがいやに蒸しあつく頭が壓しつけらるゝ樣である、何處にか行き度い日の午前の樣でもなく珍らしく落着いて針仕事などしながら十一時頃になつた、愈々行くのだろうかと自分で思つてる、丁度十二時に有無はいはせぬといつた風に何か歌ひながらさも〳〵樂しみそうに歸つた子供を見たら二分の保證も論なく加はつてその仕度をする、

先づ人間の仲間にはちと御縁が遠うそうな君の處に行くのだから忘てもお腹の用心はと手提の籠にはぱんを入れた、外には何もない例の鉛筆やノートも此頃少し飽が來て思ひ出すのもいやである、家を出て三町も行つた頃ポツリと一粒落ちた變だと思つてると又一つ二つ空は青々として光つてる、白い綿の樣な雲がちよい／＼飛んでは居るけれども此位なら却つて面白いと、引かれたか引いたかして親子は小鳥の樣に電車まで走つた、

電車は心地よく麥秋の野を縫ふて走る、そよ風が生毛の樣に軟かい苗代の稻を吹く、桑畑も大方切秣になつて小さな／＼茅屋の隅々まで養蠶の後の光景が窺はれる、赤城も榛名も六月は眠いといつた風に薄衣を被つて夢心地である、伊香保に行く東京のお客であろう、餘り上品でもない中流の妻君が赤坊を女中にまかせ四つばかりの女の子相手に引切なしに居眠りをして居た、外は皆此邊のさり繕はぬ男女の連中で他愛もない風情が一層氣に入る、東京の電車だと何時もかしこまつてあたりに氣をもむが此處のは仲間が呑氣な上に山を見ながら野や畑を行くのだから全くタガをはづした生活の好きな方には第一氣に入る筈、私も大好きとこんな事を考へながら澁川に着いた、去年からお馴じみの茶店に一寸寄つた、此店には電車の形に造つた大分大きな螢籠があつて昨年はそれから澤山貰つて歸つた、その記臆が鮮かな子供は又懷しい人に會つた樣にその籠を見て喜んだ、お茶屋の婆さんが、けげんな顏して見て居たが思出した樣にまー坊ちやまは昨年のあの坊ちやんでしたね……と切りに愛想をふりまく、此春小山文學士と私と二人で此店に憩ふた時には知らぬ何處かの人の樣な風であつたのに今度は螢と子供に一年も前の連想が湧いたと見へて家中のものが大さわぎをする、此爺さんは何うも其時代の雲助といつた樣な者に相違あるまいと小山さんが判斷されたその老人の番當が矢張り曰くありげに尻端折つて世話をやく坊ちやま螢がまだ澤山出ませぬ、直ぐにお宿にお屆け

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

しますからねと伊香保まで行くものゝ樣にお婆さんが話てる、否今日はすぐ上の別莊まで來たのだから、ならば夕方の歸りに幾疋でも貰へる樣にと依賴した而して伊香保行の電車に乘せてもらつて途中でおろされた、卽ち特別の待遇をうけて彩虹庵の方へ進む、一度來て勝手を知つた小供は案內する積りで遠く畔道を走つて仕舞つた、麥の穗かげに帽子がちらつくのを見失はない樣にと心配した、左側



は山からの水が大きな石や小さな石の間をくゞつて、ぬけて雪の樣な眞白い泡を立てたり、水晶の樣に透き通つた玉となつたりして流れて居る、それに朽木の橋などが懸つて、ヒユーゴトン〳〵と眠むそうな水車の響が聞えて來る、帽子のかげが隱れたと思つたらすぐカーキ色の仕事服を着けた彩虹庵の御主人が見へて兩手を高く擧げながら歡迎の意を示さるゝ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

私は一町も二町も手前の方から遂々來ましたよ〳〵とくりかへしながら其門に入つた。眞實結構のところ奇麗な、うつくしい、それらのあらゆる形容詞もなほ足らぬ心地がする、だから人が訪ねて來ぬと御不平も無理はない、大赤城を一目に集めた廻椽の端に突立つたまゝ私は動きも取れぬ、左はだんだら坂の麥畑につゞき右からうしろにかけては青葉の山がさしのぞいて鶯の聲が小止なく聞ゆる、もの持ちの隱居が數奇をこらした別莊、ながめは問はず、建物なら庭の草木のたゝずまひなら、石ころ一つも仲々考へたものである、半年でも一年でも美術家の夢を守ることが實に此家の幸福であり又使命であるかの樣にも思つた、有田さんは今日も一人、畫筆忙はしく製作に從事して居られた、南洋土産の幾枚かゞずらりと並んで、丸窓と中床にはバタビヤの更紗が南洋のかほりを送つて居る、此頃はお隣の水車の若衆を始め村の小學校の先生達が打むれて南洋の談を聞きに來るとかで、もう御免だ〳〵といつて居らるゝ毎日同じアルバムの御講義も活動寫眞の辯士めきて全く無趣味なものでせう、次の間の爐でお茶を沸かして持參のぱんを食べながら例の如く何だかお話も面白かつた、山に行くより此處にかうしてもうしばらく〳〵と思つたけれども、泉水の金魚やお庭の花や、それ等に少し飽いて、獨り遊びに疲れて來た子供が切りに迫るのでさらばと直ぐ上の沼迄出かけた、つまらぬ人間より餘程上等だと有田さんに可愛がられて居る――空氣枕から空氣を出すと無暗に怖ぢけて引込むその犬ころもお伴をした、青葉の下の浸々した道には白いぼや〳〵した花が一杯ある、思ひもよらぬ片方に牛が一疋寢て居た、こんな處が畫題になるとかならぬとか、左樣な話を聞きながらだん〳〵上りて、薄濁りした恐ろしい程靜かな山間の沼に來た、足許から水鷄が立つ、月見草が三五輪沼のふちに咲いて居る、あらゆる鳥の樂音が向ふの山の暗き木立をもれて聞えて來る、有田さんは犬ころ相手に芝生に寢ころんで切りに何か興がつて入らつしやる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

私は羽蟲を追ふて足許のあやしげな子供を心配して思ふ樣に此靜けさを味ふことが出來なかつた、餘り寂しいので沼を見たら死といふ事の外には何の連想も浮ばなかつた所爲でもあろう。

暫らくすると黒い雲が山のうしろからぐん〳〵上つて來る、冷めたい風が顏を撫づる、降りそうだと大急ぎに足を返した時はもう遲かつた、子供は有田さんに賴むで薄いショールを被つて別莊に着いた頃は見渡すかぎり雨しろく凄まじい有樣となつた、時時恐ろしい雷の音もまじる、夕立だから長くもあるまいと平氣では居つたがなほ空を見ては案じた、而して一時間餘りも又お茶を啜つた、仙人の家には俗人の慾をそそる樣なものは一つもなくて、邪宗門の朗吟を聞いたり所謂タガをはづした生活の講義を聽いたりした、邪宗門といへば有田さんが寢言にも忘れぬ樣に愛讀して入らつしていつも話の行つまりには之を聞される其御陰で私も此頃少し此詩味が分つて來た樣にもある、しかし一人で首をひねつて讀む時よりはすう〳〵と出る他の朗吟を聞くのは又一種の味ひを覺ゆる、つまり一度人の腦髓に消化されて幾分か、たべやすくなつて幼ない私共の腦に這入つて來るからだろうか、

雨はやまぬ、日は暮るゝばかり、窮餘の策に身をかため歸途についた、その容態が餘り見事であつたから又お得意の繪や日記の材料になるだろうとそれのみを恐ろしと云つたら今日はそれにはせぬと仰しやつた、流石にしよぼ濡れた親子の樣が歌ふべく描く可く餘りに慘めであつたと見ゆる、大雨の爲めに螢には滿足を得ることが出來なかつた子供も、思ひもかけぬ破格の難儀にすべての慾もなくなつて電車に乘つた、雨はやゝ小降りになつた、車は安樂に走る、低い忙はしい雲が山の裾野を驅つて居る何氣なしにガラス戸越しにそれらの景色に見とれて居たら子供が何で覺えたか、此頃時々こんな言をいふ、が又歌がある？歌が出來て？？と切りに心配そうに私の顏をのぞく、かうした氣分のかうした時に我母は歌

を考へて居ると見込をつけて居るのか、はい〳〵一つ歌つて見ようかと聲を大きくしたら、いやだ――家に歸つてからですよと私の口に自分の掌をあてゝ歌はせなかつた、そしてはづかしそうにあたゝりを見まわして居る、母の氣がふれた時少なくもちと變な時にそういふものは出來るものと觀察して居るらしい誠に僞りのない觀察である

　取つて來た卯の花はいつの間にか萎れて仕舞つた降り續く雨はいよ〳〵梅雨となつて、小止みの間もなほ雲が重い、冴へた山の色も暫く忘れねばならぬ彩虹庵の君が今日の便りに此間はまだ思ふところの半分も果さなかつた、あれでは不滿足であるその內天氣を見据へて又來る樣にと、そして昨日も今日も雨の山には郭公が啼きつゞくので眞逆何處かの女が血を吐いたわけでもあるまいに……と書き添へてあつた。

◎下婢の爲めの講演會

記者

▲高等女子師範學校主催の通俗講演の第一着として、下婢の爲めの講演會が去月半ばその講堂に開かれるといふ。講演は同校教授の宮川すみ子女史の「臺所の片付け方に就て」と同平田敏雄氏の「瓦斯の話」といふのであつた。誠に思ひ寄りの催しでもあり、また講演も甚だ適當のものと思つて、定刻に先つて、記者も出席して見ろ。

▲女子の最高の學府なる同校の講堂はさすがに廣く且つ嚴肅なものである。滿場所々にベンチを置いて、ゼレニヤム、朱梠、マクレッ等の時節の鉢が并らべられてあるので、先づよい心地になる。

▲講堂入口には師範生徒が丁寧に案內の勞をとられる。何やらの新聞に見えたやうに、定刻迄にひし〳〵と詰めかけたる下婢は、後れ毛一つなく、さつぱりした身裝して、つゝましやかに入り來ると。彼の女等の爲めには、この講堂に入る事が既によい教育である。

▲雪白の料理服を着て講壇に起つた宮川すみ子女史は、前のテーブルに置かれたる鍋、釜、お鉢等の臺所道具をその儘に使つて一々實際にして見せられる。これは女史獨特の講演振りである。臺所を片付けるには、先づ集め方をしなければならぬと、それ〳〵洗物を分離して、次に洗ひ方にかゝる。お鉢を磨きながら一つの教訓話を加へられる。（三十八頁へ續く）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

外國婦人討論會

記者

○日本に居る外國の男子方は、種々の會合があつて互に親睦をし、討論、研究して、智識を進める機會も多いが、婦人の爲めにはさやうの會合の無いのを遺憾とし、數年前外國婦人討論會なるものが開かれた。英國人で永年日本の傳道に從事して居るミス、バラードが現今の會長である。この會は會員各自の家を巡囘して、極々内輪に、手輕に、そして遠慮なく會合するを趣意として、會毎に必ず何かの問題に就て討論する。近頃はその討論問題につき豫め二人位宛會長から指名して研究發表をするやうにし、それを中心として各自に意見を述べるやうにする。問題は「智識を增すに從つて人間の憂ひは增すものか否か」といふ心理學的のものが出づるかと思へば或時は「ポケットは有る方がよいか否か」といふ問題である。五月はこの會が英國大使館で開かれたので、場所が廣いからとて、會員は各自一人の日本のお客を誘ふ事を許された。それ故英、米、獨、佛、その他各國婦人の間々に日本の婦人一人宛席を占めて、さて討論に移つた。議題は「子供に恐い話を爲しても能きものか否か」であつた。

○その日研究して來たのは、ミス、タムソンとミスグリーンと申す方々であつた。ミス、タムソンは妖

怪談等の中には随分慘酷極まるものがある。例へばよく〱子供に話す「青い鬚」等の如きは、或人が妻を殺して石窟に匿し、また妻を貰つては之れを殺して石窟に入れて置いた。最後の妻にはその石窟の鍵を渡して決して之れを開けてはいけないといふと、妻は夫の留守にその鍵で石窟を開くと、中から死骸が幾つも幾つもあらはれた。戰慄して直ちに戸を閉ぢたが、鍵を握つた手に血が付いて取れなかつた。夫が歸つたら必定顯はれて、また自分もどんな目に遇ふかも分らぬと思つて居ると、果して夫は歸つて掌の血を見て、血相を變へてこの妻をも殺して終ふといふ筋であるが、これ等は子供の神經をどんなに刺戟する事であらう、或子供の如きは、恐い話をした夜はきつと夢でうなされるといふとて種々の引證を以て恐い話は子供に聞かせぬ様、全く取去るべしといふ意見であつた。

○

ミス、グリーンは之れに反して、先年自分は日本

の話にある惡魔が子供を取つては食べ、取つては食べして居ると、一人自分の子供を失くした。すると終に氣が狂つて、或神様にどうかその子供を歸してくれと頼むと、神様はそれでは歸してやるから、これから子供を殺してはならないとお仰つた。これから惡魔は變つて、子供を守る神様となつた(鬼子母神の事ならん)といふ話を書いて、出版して貰はうと米國の兄の許に送ると、こんな話を子供に讀ましてはならぬと云はれて、出版を見合はせたが、自分はさうは思はない。恐い話は子供が大層面白がるもので、それによつて神經を興奮させるよりも、好奇心を滿足させるのではなからうか。なほさま〲の例を擧げて、恐い話も子供に聞かせる方がよいとの意見を述べられた。

○

これ等の議論に對して、會員は各自意見を述べる獨、佛その他の國々の方々も、奇しい英語ながらも意見を述べる。けふの來賓の日本人を省みて頻りに

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ごうぞごうぞと促したが、誰れも起たない。終に武田錦子女史は起つてこう話された。「自分は教育書や何かで恐い話は子供に有害であると學んだので、自分の子供や、預つて居る甥や姪を育てる時に、始めはミス、タムソンの御意見のやうに絶對に禁止した然るに甥は何時の間にか「冒險」といふ雜誌を買つて來ては、頻りに讀んで、何千丈の崖を飛んだとか狼に食はれたとかいふ記事を面白がつて讀んで居る。讀んではいけないといふと、二階に上つては讀む、そして次の月もまた次の月も讀んで、とう／＼四五年經つたが、神經質にもならず、別段の害もない處を見ると、子供には大人の考へる程かやうな事が恐ろしいのではないと見える。却つて面白いので其面白さを無理に抑へるのはよくないやうに思ふ」と述べられた。

○

また來會の一人でかういふ話をせられた方がある米國で十三ケ國の子供の集つて居る組を敎へた事がある。すると歷史の時間に南北戰爭に差しかゝつたこれは隨分血なまぐさき事ではあるし、各國の子供が居る處故差障りもあらうと此處は拔いて、次に移る事としやうと云つた。然るに子供等はなぜ戰爭といふ面白い處を拔くか、私共は人を打つたり、殺したりするのが大變面白いから、どうか話してくれとて、皆が大分望んだのでとう／＼話した事がある。子供にはかやうな事は隨分面白いので、別段害にはならぬと見える」と云はれた。

○

會長のミス、バラードは自分は子供は持たないが想像の子供を持つてと云つて、面白く會衆を笑はせ乍ら、餘り神經質の子供に、ひどく慘酷の話をする事はよくない事であるし、また一般の子供にも餘り極端なものは避けた方がよいであらう。然し實際この世の中には、恐い事も澤山あるのであるから、實際に在り得べきやうな恐い事を話して置くのは、子供等がそれ等の場合に處する用意にもならう。例へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

は火事はどんなに恐しいとか、戰爭はどんなものとか云ふ事は實際ある事であるから、話せば、之れに對する心得にもならう。又突飛な事を聞かされて強ち直ぐ子供がそれを眞似するといふ事はなからうといふのであつた。この討論は決を取ると、三と一の割合で、恐い話もした方がよろしいと云ふ事にきまつた。

○

最後に皆から次回の議題を募つた。一人の若き婦人は起つて「今迄老いたる母を一人で支へて居つた若き女が、もし結婚するとしたらば、どうしたらよいものであらうか。この場合結婚してもよいものであらうか」といふ事を議して欲しいと云ふ。皆は笑つた。また一人は育兒に就ての問題を取つて欲しいと云つた。かやうにして多少の意見が出た。會長は何れ適當と認める問題を撰んで後で研究者をも指名する事であらう。かくて茶菓の饗應に移り自由に談笑して散ず。凡て無邪氣にして淀みなく運んで行く

——（三十四頁より續く）——

▲横濱のある商家の召使ひが三度三度暖い御飯を食べた。同輩がかくと主人に訴へると、主人は早速その召使ひを呼んで、事實を問ふた。召使の云ふのには「かやうな大家の臺所では、御飯の洗ひ流しが澤山出る、それを取つて置いて、三度三度ふかして食べて居ります」と答へたので、主人は非常に感じたのはもとより、その召使ひは次第に出世して、今ではその地の屈指の財産家になつて居ると。

▲磨き粉も毎日付けては勿體ない故、隔日にし、一日は洗濯シャボン斗りで磨くとか、たわしにシャボンと磨き粉の付いて居るのを、一々洗ひ落しては不經濟故、たわしは二つ用意して、一つで磨き一つですゝぐやうにせよとか、物事の細い事をもつましくする事を教へられたのは、多とすべきである。

▲平田氏のは、實驗を以て種々の瓦斯を見せ、今日俄かに需用の增したる石炭瓦斯の使用法に就て注意せられた。何れも有益で、且つ皆にもよく解つたことであらう。

▲その間々に同校教授方のバイオリンとピヤノ合奏や音樂院教師生徒諸氏の三曲合奏等を以て興を添へられた。この會で耳にした事は集まつた千に近い諸家の下婢達が、定めて朝夕の事々に思ひ出されて益を與へる事であらう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

耳學問の卒業者

S T 子

米國婦人の實話

「百聞一見に如かず」と古めかしい申分ながら、誰しも外界の智識を啓くは目からとのみ信じて居ります。其中に耳で世界の大勢を取得した方のお談話は、甚だ耳寄りの實例と思ひます、又何でも彼でも都に上つて資格を得なければとか、お嫁にゆく飾に名の有る學校を卒業せればとか、只管虚榮に憧る、現代の女學生や、學問は何でも學校に入つて手を執るばかりに導ひてくれる何々の專門家の先生がなければと信じて居る一種の依賴心ある人に此精氣潑溂たる努力家の獨立心を樂にしたならばと茲に無名の成功者を紹介致すのであります。

私は六人姉妹の中の季子、五人の姉達は容貌も十人並に勝れて居る上に、各自專問の學問や技藝を修め、人中に出しても押しも押されもせぬ程の者許り私の家で交際會を開いたり、姉達を話對手として遊びに見える歷然とした大學生などの會ある時などには、皆音樂に談話に腕に撚をかけた接待ぶり、處が私と來ては皆目の取柄なし、容貌の醜いのが第一氣が引ける、加之に何の秀でた才もなく、高等女學校を終つた後は母の手助けに臺所の事、裁縫の手傳ひ、姉の華奢な白い指に比べては私の大きな手を出すのも耻かしい程です。音樂は一番好きですけれど練習し樣とてピアノに向ふと、姉達が私の間違ふのを笑止いと言つては吹出すのに、果ては思切つて音も立てられなくなりました。畫も大好きながら一人の姉に畫家があるので、下手なもの書き出すのが氣羞かしいと言つた憶病者です。他人樣が姉達を賞めた末に私に向つても「貴女は何が御達者で」と問はれますと赧くなつて「何にも」

專門學校に入り度い望みは勃々と起り乍ら、家の都合で兩親が私の爲に定めた運命に抵抗さへもし得ずに、默々として自らの意志さへ枉げて仕舞ひました。終に私は唯獨り仲間外れて、好きな書物と裁縫箱を友として交際會などある時にはさんざめく樂し

さを外に、座敷の次の間に潜む事としました。仲間を外れると迄に自らを卑下した時の心の苦しさは、うら若い身には鋭い痛みでした。終に人々は私が自分の心に背いて苦しむのを知らずに。彼れは獨居が好きなのだ、と定めて終ひました。處が或晩の事でした、矢張りお客の席で姉がピアノを彈いて居ますのを、私は次の間で恍惚と聞とれて居ますと、中で些と年長の紳士が私の側に來て、「何を此處でしてお出ですか」との問に「唯聽いて居ります」と答へました、すると其紳士は珍らしさうに「聽て？……夫りや何よりの天與の才だ」。意外の言葉に驚いて、持つてた仕事を膝の上に置て、其紳士の面を凝視ました、紳士は諄々と私に聽者が同情を以て聽く時には語る者は如何に其同情に動かされ勵まされるかを説いて、「但し注意ある賢明なる聽者なければ何にもなりませんよ」と、夫から一人の役者が聽衆の中の唯だ一人の熱心な同情ある聽き振りに勵されて以來、舞臺の上に光彩を放つ事の出來た例や、之に反して

聽者の不熱心に終に身を誤る迄に至つた藝術家の一例などを擧げて、懸命に私の前に新しい世界を展いて下さいました、時も何も忘れて。「ア遲くなつた」と愴惶に暇を告げて「さらば熱心の聽者よ」と言ひすてゝ歸られました。私は其言葉を一句も漏さず再び心に味はひまして、さて他の人の得た一夜の歡樂は、過ぎては何の願をも留めないけれど、たゞ今夜見た新らしい世界は永久に他人の立入る事の出來ない私獨りの美くしい處と嬉しく思ひました。私の耳底に鳴つて居る紳士の言葉に、一夜はまんぢりともせずに、翌朝は心に固く決する處あつて、起き出ました。

他人の境遇を熱心に興味を持て聽く時に、私は人と此等を頒つ事も一方法、從つて私も臆病な心の戸を碎く事も出來るかも知れないと、夫からは講演、音樂、果ては會話と何事によらず心を集中して質問を連發しては語者の最上の智識を引出さうと試みました。終に自らの利益からでない、誠實な同情を以

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

て語者を勵まさうと言ふ私の目的は達して、軈て私の周圍は折々各專門の學術を修める人々の集合處となりました、美術も工藝も、細くは鐵道から造船術地理、歷史、博物と二年間、私は耳の學問を續け、書物からも研究して大抵の事は專門家を凌ぐ程になりました。追々私の姉達は嫁づいて私の家は私一人の舞臺となり、私も終に一人の未來の政治家を得ました。私の心迄もと許した其人は其當時苦學生で、身にも裝にも構はずに法律を學んで居りました。法律の智識は、其人から明け暮れ聽者となつて學びました。

私共兩人の結婚後は隨分樣々な困難と試煉とで戰ひ多忙でありましたが、私の見識は愈々廣く、高くなつて參りまして、却て取立てゝ才のない醜い女と生れた幸福を喜びました。

昨年私共兩人が歐州に旅行する途すがら、甲板上で追懷談を致した時、良人は私に向つて、「何時、如何なる處で講演をする時も、常に卿が予の前にあつて聽いてゐると想像する」と申ましたから、內心私は喜びながらも「何故で御座います」と反問致しました「卿の聽く樣が如何にも私の全力を傾注して語らなければならない樣にさせるから」と私の滿足は皆樣の御想像以外です。

今良人は華盛頓に、米國の知名の一人と申ても過言では御座いません。若しや其名を申たらさてはと小膝を打たれるで御座いませう。

○

オスカアワイルド曰く「私は心から自己實現の清新なる樣式を求めて居る。私が現在の要求はこれである、而して先づ第一になさゞるべからざることは世間に反抗せんとする苦い反撥の感情を脫し去ることである。」これ程反抗の精神に滿ち溢れた言葉を、めつたに私は見たことが無い。しかも自由な感情の發露と、多分な淚のかゞやきとを以て。

島崎藤村

子女教育に對する母の務（其の廿一）

自然と子供

其の二　動物に就て

海老名みや子

△お伽譚と動物

むかし／＼のお話に、猿と蟹、カチ／＼山、桃太郎、舌切雀、足柄山の金太郎、いづれも／＼も人間と動物とを、面白く取合せたものでありまして、子供はこんなおはなしが大好きで、もうきいてる自身が桃太郎や、金太郎になりすまして、鳥や獸をお友達や御家來といふ氣になつて、動物に非常な親しみを感ずるのであります。元來子供は自然界に最近いものでありますから、自ら自然界に親み安く、又從つて好むものであります。試みに子供に、今日はお休みだからどこかへ遊びに連れて行つて上げやうと申ましたら、十中の七までは動物園にと申であらうと思ひます。

△上野の動物園

動物園は子供の遊び場として慥かによい處であります。數限りない子供のお友達が、各自己がすまゐをかまへて子供のお客様を待つてをります。どうです、先あの象が肥大な體に、不似合な小さなやさしい眼で人を見やりながら、長い鼻をのべたり縮めたり、自由自在に使用しながら、食物をたべたり、水を呑んだりして居る姿は、ナント滑稽で、面白いものではありませぬか。印度當りのやうに若し家に飼

ふことが出來ましたら、きつと子供のお友達、又保護者となり得る獸であらうと思ひます。又かの駱駝もさうです。不器用な體に不似合な優しい顔をしてポンヤリとした無邪氣な穏やかな眼ざしして人を見やる姿は何ともいへない懐かしい氣持を起させるものであります。いつでありましたか私は盛夏のしかも日ざかりの午後二時頃といふに、動物園を見舞つたことがありました。それは實に面白うございました。獅子王も熊公も、虎も豹も、午睡の眞最中でありました身は異郷の囚であることを忘れて、アフリカの野や千里の藪をかける夢でも見て居たのでしやうか、狹い鐵柵の中をおのが世界と誇らめてたわいもなく眠つてる處は、どんな猛獸でも可愛いものであります。又かの猿の如きは、わけても面

白い獸でありまして、流石に學者が我々人間の先祖だと申される程あつて其所作がどこぞや人間と似通ふた處があります。中に又とんでもないことしてすましてる處の滑稽さ加減、とても笑ずしては居られませぬ。若し彼らと自由に戯れ遊ぶことが出來たら嘸面白からうと思はれます。其他樣々の動物、皆各自特性を備へて、中にはかの河馬の樣に異樣な形をして居るものもありますが、子供は決して不氣味だとも、こわいとも思はない樣です。更に鳥の方面を見渡しますと、これは又陽氣で、美しくて、氣持のよいものであります。池の廻りに群れ居て、水に浮び木にとまり、互に相爭ふでもなく、各々己が種族と親しんでる處、實に美しいではございませぬか。ア、此樂しい面白い動物園は慥かに子供のよい遊場であります。が、こゝに困ることは、此動物園には時間の制限あり場所の制限があつて何時、何處からでも行かれるといふわけには參りませぬ。又動物にも各々制限がありまして、其檻の中から一歩もふみ出すことは出來ませぬ。マアお珍らしいお顏を拜見したといふ迄で、充分子供の好奇心を滿足せしむるわけには參りませぬ。然るに、此動物園を私共各自の家に、又其屋敷に、其周圍に有つことは、出來ないでしやうか。私は一度こゝに思ひを注いで具さに調べて見ました處、我家、我屋敷、我々の周圍はまさしくこれ

△天然の動物園

であることを發見致しました。試みに今こゝに、海老名の家族と共同生活を爲しつゝある動物は幾種ありますか列擧して見ましやう（勿論時々往來するお客樣も這入て居ます）恐らく其數の多さにお驚きになるだらうと思ひます。

▲獸としては猫、犬、鼠、テン、イタチ、モグラ、馬、

▲鳥には烏、鳩、鳶、雀、目白、燕、四十カラ、鶯、モズ、ミソサザイ、ムク、ヒヨ、郭公、ゴイ鷺、鷄、木ツツキ。

▲蟲には蟬、カマキリ、ハイ、蚊、蝶、蜻蛉、ホタル、兜虫、イナゴ、コーロギ、バツタ、鈴虫、クツワ虫、キリギリス、小金虫、スキーチヨ、蛾、カミキリ虫、蜂其他名を知らない虫が幾つあるか知れませぬ。

▲昆虫には蛇、蛙、トカケ、蜘、マイマイ、ナメクジ、毛虫、芋虫、油蟲、蚓、根切蟲、ウジムシ、蚤、ミノ蟲、床蟲、蟻、尺取蟲、蠶、桑蟲、ゲジゲジ、こゝに擧げたものばかりで六十種からありますが、蝶にも樣々の蝶あり、蟻にも樣々の蟻があるといつた樣に、皆其同族の中のちがつた種類を擧げましたら、恐らく百以上にもなるであらうと思ひます。これは優に家庭の動物園と稱するに足るものではありますまいか。しかもこれらは殆ど我々人間と雜居の姿でありまして、あるものは寢食を共にして居るといつてもよい位であります。この夥多しい同居者に對して、私共は如何なる態度を取るべきでありましやうか。子供を敎育する上に於て考ふべき問題であらうと思ひます。此澤山の同居者、否居候の中には實際迷惑な、厄介物も隨分あります。マア此頃の時節では、蚤、蚊、蠅など、晝夜入替り、立替り、身邊につきまとひて攻めたてられうるさくて堪へられませぬので氣の毒ながら目下其征伐に取かゝつて居りますが、實を申せば私共人間の智惠が今少し進んで來てこんな厄介物は發生しない樣に注意致しましたなら、無益な殺生はしないですむわけであります惻隱の心とでも申のでしやうか、出來ることなら無益の殺生はしないですませることの出來る樣に致し度いものです。

△親めば愛らしくなる

毛蟲、ウジムシ、芋蟲、蚓、ナメクジの如き、打見てゾツトする樣な不氣味なものも澤山ありますが、これらさて其生活狀態、彼等相互の關係など仔細に考へて見ますと、無下にいやらしいとばかりいふ氣にもなれませぬ。いやらしいといへばかの蠶の如き

も幾千、幾百と籠の中にウジョウジョと蠢めいて居るのを見ましては、初めて見る方などは決して好い氣持は致しませぬ。けれどもなれてみますと不思議にも一種の愛情が發して參りまして、手にとるのが氣持がよい樣になります。それが奇麗な繭となり又元の姿に似ても似つかぬ蛾となつて出て來る處など實に面白いではありませぬか。芋蟲毛蟲とても同樣で一度繭に姿を隱して美くしい蝶と化し翩々として花から花を飛び廻る處を見ては實に造化の妙を讃へずしては居られませぬ。私の屋敷は蟻屋敷とでも申のでしやうか、幾千萬の蟻が居りますが實に夥しいものであります。其忙しい働きぶり、其賢い生活の仕方を見ますと只々感服することばかりであります私がこゝに書くまでもありませぬ、皆樣の御宅に居る蟻に付て研究して御覽遊ばせ、あの小さな體にあれ程の智惠や精力が與へられてあるとは驚ろくではありませぬか。私は子供時代蛛に興味をもつて、女郎蛛とか申美しい種類のものを集めて來ては大きな

木に放つ置て、彼等の擧動を見たことがありますが仲々面白いものであります。前夜木に放つて置きました蛛が翌朝見ますと、此の枝から彼の枝におのが身より產み出した糸を以て、巧妙な巢を作つて居ります。そして其中央に陣取つて、蟬であれ蜻蛉であれ、一度我城内に足ぶみしたらんものは悉く生捕にして呉んずと、シヤに構へたる樣子の小面にくくも滑稽さ加減、何ともいへたものではありませぬ。一寸巢でもつゝついてからかつてやり度くなります。

△天來の音樂

此樣にいやらしいとおもふ蟲でもよく近づいて見、馴染んで見ると愛すべき點もあり、憐愍の情を催さしむるものがありますが、ましてや禽類になりますと、人に快感を與へ限りない興味を起さしむるものであります。騷々しい蟬の聲でも亦妙味ないものではありませぬ。ミーン、ミーンといふ啼き聲をきゝますと睡い樣で如何にも盛夏の心地が致しますが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

オーシックの聲をきゝますと、いづこともなく秋風立つ心地がして淋しい懐かしい氣持が致します殊に靜なる秋の夕、千草にすだく蟲の聲をきく時、かの小さな體から出る處の餘音嫋々たる聲は、澄み渡る空に響いて腸にしみ渡る樣であります。これをしも天來の音樂といはずして何をか申ましやう。ア丶此面白い蟲、美しい蟲と子供は慥かにお友達たるべきだと思ひます。實際子供は蟲を好みます。蟬や蜻蛉や蝶々を幾つともなく捕へ

ては籠にいれて樂しんでをりますが、願はくは彼等の墓ない露の命を縮める樣なこと致させ度ありませぬ。捕へても復大空に放つて其自由の生活を見て樂む樣に敎へてやり度ものであります。

更に進んで鳥の世界、獸の世界になりますと、人間との關係は一層密接になりまして興味限りないものがあります。次號に述べることに致しましやう。

餘裕ある生活には規律が必要

某夫人談

▲此頃のやうに諸物價が高くなりましては、中以下の階級のものは中々暮し難う御座います。定まつた收入の内から衣食住の凡てを切り盛りして行く事は容易の事ではありません。それに何かと臨時の支出をせねばならぬ事件が起つて參りますから、餘程注意をして居ないと、後で大に困る事になります。

▲大體から申せば西洋婦人の家政の取り方は凡て嚴重に豫算をたて、夫れを越さぬ樣に万事規則正しくして居らるゝやうに兼ねて聞いて居りますが、日本婦人はどうも不規律のやうに思はれます。勿論多くの姉妹達の内にはキチンと一年中の計畫をたて、月月の豫算を作り、收支相償ふて立派に家政を處理して行かるゝ方も澤山あるであらうと思ひますが、十中八九迄はどうも行き當りばつたりで、年中追はれて居らるゝ樣に思はれます。

▲金持は金持、商人は商人、月給取りは月給取りでそれ〳〵身分相應の暮しをして、不自由な中にも自ら餘裕のある生活をしやうとするには、どうしても前から豫算をたて、一定の節制を守り、規律を破らぬ樣にして行かねばなりませぬ。限りある收入の中から際限もない慾望や虚榮心の滿足を充たさうとして、苦しい思ひをしたり、無理な苦面工夫をして、不愉快、不滿足にその日〳〵を過すことは、實につまらぬ事であります。

▲帝都に居りますと、日々目にふれ、耳に聞きますことが結構な事ばかりで、不足勝ちな者から考へますと實に羨望に堪へぬ樣な事が澤山ありますから、つひ虚榮心をそゝられる事になります。無理な遣り繰りをして迄も、外見を張つて、人に誇らうとした結果は、つひに我身は元より一家の不幸を招くやうになります。或友人が嘗て縁あつて富裕な商家に嫁ぎました。舅姑はあつても隱宅に別居して居られる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

し、主人はお坊ちやま育ちの至極心やさしい好人物であつたので、家政萬端、主婦の心のまゝでありました。性來虚榮心の強い友人は出來るに任せて贅を盡し、我儘を働き、あれも改良、之も改良と、自分の思ふ樣にすつかり家風を改良―改惡かも知れません！致しました。

外に向つても華々敷活動し、日夜虚榮にあこがれて、人にもてはやさるゝことを此上もなき誇りとして、榮耀三昧に年月を送つて居りました。私共局外者から見て居ると、實にその心根が氣の毒で、且その友人の爲めにもその家の爲めにも恐れを抱かずには居られなかつた、處が先づ十年位は餘り外にぼろも出さずに、美麗に切り回して居られた樣でしたがとう／＼數年前からはにつちもさつちも出來なくなり、前の榮華の夢のあとはない樣になつた。實にお氣の毒だと思ひます。此友人が今日の結果に立ち至つた重なる理由は、取も直さず豫算も立てず、何の節制をも加へず只浮薄なる虚榮心にかられて行當りばつたりの事をして來たからであらうと思ひます。勿論之れは主婦

たる友人一人のみの過ちではありません。その良人たる主人も共にその責を負はねばなりません。もし此友人が豫算をたて、眞面目に家政を處理して居たならば、固き礎は彌々固く榮えた事であらうに呉々も惜しい事をした。して見れば一家にとりて豫算をたて決算を嚴重に精確にする事は、最も大切な事であります。且又どんな富裕な家でも、どんな場合にでも、節儉すると云ふ事は斷行せねばならぬ。是は一家の法律とせねばなるまいと思ひます。

▲分を知ると云ふ事は、誠に容易い事のやうですが、實は甚だ六ケ敷事であります。自らの分を知り、その分に安んじ、感謝して日を送るといふ事は仲々出來難い事であります。友人のよき事のみに目をつけて之れを羨み、とても出來ぬ相談と知りつゝもこれが出來ぬとてやきもきして自分許りでなく、家族のものに迄、不愉快な思ひをさせる事は、甚だよろしくない事と思ひます。一家の經濟を背負ふのは、婦人の責任であります。主人が日々額に汗して得たる報酬を。妻たる者が自分の一時の虚榮心を滿足さする爲に、むざ〳〵と惜しげもなく浪費しては、妻たるものゝ責任を盡したとは申されませぬ。

▲好んで上流社會の婦人と往來して、良人に經費の不足を訴へ、豫算外の支出を受けながら、猶、支拂ひに事を缺いて居る奥様達のある事を知つて居ります。

私宅には高等女學校に通ふ娘があります。毎月きまつた金を小使として渡しておきます。たとひ不足する事があつても追加は致しません。お友達は極つたお小使の外に、足らぬからとてその倍も二倍もお貰ひになる由を娘からきゝます。それは一圓二圓の事でありますから、豊かなお宅では何のお差支へもありませんが、無節制と云ふ事は決して良くない事であります。若し此の不規律な心が成長して參りましたならば、それこそ大變であります。その女が成人して一家の整理を致す様になつた曉には、必ずだらしのない、不規律な主婦になられはすまいかと案

じます。でありますから高等女學校にも通ふやうになりましたら、よく締めくゝりを致し、規律正しく金錢の浪費を致さぬ習慣をつける事が、大切と思ひます。

▲「日本人は自國よりも豊かな外國人の華美浮薄な事ばかりをまねて、自分の富に不釣合な豪奢をして居る」とは、よく外國から歸られた方々から聞く話です。私共は獨逸婦人の勤儉貯蓄の美風にならひ、冗費を省き、一家の家計を豊かにしたいものであります。餘裕ある生活は一家幸福の基であります。幸福なる一家が集つて一國を作つたならば、その國は幸福であります。我れ等婦人は臍をかためて、浮雲の如き虚榮に心を奪はれぬ樣にして、堅實なる國民となりたいものであります。

夏季の哺乳兒の榮養

醫學士　山　下　清

△「ち」と「ちゝ」

一體哺乳期は早きは七ケ月、遲きは九ケ月と申しますが、先づ九ケ月說の方が穩當で、又危險が少いと思ひます。此の時期以後から離乳を致します。一體母體に少し位故障があつても、子供には母乳が生命であります。母乳の諸成分を檢査して見れば見る程靈妙不可思議であつて、結局血液の變體として見るべきものです。子供は母の血で徹頭徹尾養はるべきものとなるのです。「ち」と「ちゝ」との詞を能く味はつて見ますと、宇宙の秘義も或は此の中に存するのではないかと思はれます。

△哺乳の時間割

横道にそれましたが先づ生れたての子供は胎便が

出ても出なくても構ひませんから、産婦の乳が出ればすぐやつて差支へありません。可るべく早くから吸はせる様にせねばなりません。そして決して「マクリ」などは飲ませてはなりません。そこで始めの中三四日位は乳はさう澤山は出ませんから、皆飲ますがよいのです。漸々に、乳の出方が多くなりましたら、初めの一ヶ月は二時間半毎、次の月は三時間毎に飲ませる様になさい。三四ヶ月目では三時半間毎、五六ヶ月目では四時間毎、七、八、九ヶ月目では五時間目毎がよいのです。勿論夜は乳の分量を幾分か少くした方がよいでせう。一回の分量は子供が飲み飽きて、乳房を弄ぶ様になれば、もう飲ませる必要はありません。

△離乳期の注意

又乳ばなれも、夏でも相當の智識を持つて居らつしやる母様方なら差支へはないのです。乳ばなれするにしても極く徐々に、始めは例へば五回の授乳の

中、一回は善良な牛乳を三分の一に薄めたのを、水飴か何かで味をつけたのを一合五勺位（正味の牛乳は一合の三分一）やる様にして、之れで漸々に慣らして行き、一回が二回となり、三分一の牛乳が三分の二となり、三分の二が全乳の味をつけぬものとなり、二回が三回、四回となり、漸々に牛乳を増して終に約二ヶ月の後に全く母の乳より離す様にするのです。牛乳の傍には重湯や、薄粥や、其他の消化し易き滋養分に富んだものをやるのです。之れ等の事は成るべく小兒科醫等の指導を受けておやりになる方がよいのです。乳ばなれの時期が夏に當れば、秋に延して差支へありません。以上は平常の時の事を云ふたのですが、夏季と特別に云ふからには、何か變つた事がなければならぬ。實はこの事を云ふのが重なものです。

△特に夏期注意すべきこと

大人も夏になると渇くが、小兒だつて渇くには相

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

違ありません。此の二つの事實を以て推して行けばよいのです。極く平凡なことですが、人は氣がつかないのです。小兒は渇くと啼く、そら小供が泣くといふので乳をやる、又規則的に乳をやる人はこの時何もやらないのです。之れは誠に殘酷です。後の方はまだしものことですが、前の方になると、惡くすると子供は消化不良を來し、吐く瀉す、瘦せる、機嫌が惡い、泣く又乳をやる。醫者はすぐ乳兒脚氣だとか何とかいふので、母の乳を差止める。そこで人工營養が始る。さあ愈々以て大變です。子供はよく育ちません。育つてもブワ〱して肉も固りません。其の中に股がたれゝる、これ等からして腺病質になる。よく事がなく育つても血色が勝れない弱々しい子供になります。結核菌に犯され易くなります。之れが哺乳兒の人工營養がもともと不合理である上に更らに非常に不合理に行ふときには終に死にます。それで子供が泣いたら他に異狀のない限り、また泣かずとも乳と乳との間には、湯や麥湯のさましたてのを氷食匙に二、三杯位忘れずにおやりになることを奬勵します。朝夕はせずとも、日中の熱い時には決して忘れてはなりません。別に砂糖や何かで味をつける必要はありません。誠に「乳くれる母はあれど、茶々をくれる母はない」と云ふことがありますが、能く考へていたゞき度いのです。

△着物の事

終りに注意したきことは腹を冷さないことです。又子供は着物を着せ過ぎないことです。小兒は體温の調節作用が大人に比して惡いのです。冬は大人よりも綿入れ一つ位は餘計に入ると同時に、夏は大人よりも薄き衣を要します。これが肝要のことです。勿論子供のことであるから、氣候の變化には少々注意してやらなければ風邪にかゝります。

更らに一言したきことは、子供は健康に育て上げたいものです。精神と肉體とが健全に育つた子供ほど美はしいものは此の世にありません。健康卽ち美であります。

ローヘングリン

三枝幾子　譯

「昔日本に琵琶法師といふのがあつて、諸所を巡歴して戰物語を語り歩いたと申します。西洋にも丁度かやうな樂人があつて、いろ〳〵の物語を彈き語りして、村から村に渡つて行くと、村の一番記憶のよい人が之れを聞き覺えて、長き冬の夜などに次から次へと語り聞かせました。ローヘングリンは古い樂人ワグナーの語つたもので、今日に至る迄歐洲の歌劇壇にはなくてならぬものとなつて居ります。此に掲げたのはスミスといふ人がその筋を子供に讀ませる様にやさしく書いたのを譯したものです。また挿入の寫眞は往年長井長義博士が獨逸留學中携へ歸られたもので、同國ウイスバアデンにある王室の劇場で演ぜられたものをうつしたものであります。博士はこの歌劇を殊に好まれ彼の國滯在中十數回も見に行かれ、その愛嬢にもこの歌劇の姫の名を取つて、エルザと名づけられて居ります。（記者）」

昔、獨逸にヘンリー、フオーラーと云ふ王がありました。其頃、獨逸と海との境なる西の方に當つてベルジャムと呼ぶ小國がありましたが、之れも亦獨逸王國の一部をなして居りました。

當時、王と云へば單に武士として勇敢なる許りで良いのではなく、又支配者として賢明でなければなりませんでした。戰爭へは大概王自身兵を率ゐて參つたもので、敵は鐵の兜のまはりについてゐる金の冠に依つて之が王であると云ふことを知る事が出來ました。

お話の起りは今から凡そ千年も前の事でありましたが、丁度その時王のヘンリーは、ハンガリー人と

戰爭の準備を致して居りました。一體このハンガリー人は、獨逸王國の東の方に住んで居りましたが、中々野蠻で戰爭好きの人種でありました。故に常にヘンリーの領土を侵さうとし、勢に任せて、既に町や村などを奪ひ取り、住民を殺した例も少なくは有りませんでした。

此の樣な大膽不敵な者共を征伐するには、どうしても澤山の良い兵士の必要がありましたので、王樣は自ら國内を御廻りになり部下を集めて王と共に戰場に出るやう、華族方にお說き歩きになりました。

天氣の良い夏の一日、王はベルジャムのアントワープと呼ぶ風雅な町にお着きになりました。この町は靜かに海に流れ入る古河の沿岸に位して居りまして小さい乍らもブラバント地方での一小都會をなして居りました。アントワープの武士達は、ヤレ王樣のお着きと云ふので、皆華やかに着飾り、手に〱國旗を飜へして、誠心こめて歡迎致しました。そして王が猛惡なるハンガリー人の不正をこらすには、是非とも皆の者の助けを借らねばならないと仰せられた時、一同は喜んでその召に應ずる事を約束致しました。

此時代には皆戰術と云ふ事を非常に愛して居りましたし、殊にヘンリーの樣な偉い首領の部下として働くのは武士たる者のこの上も無い榮譽と考へて居つたので有ります。其夜は酒宴を催し、更くる迄、一同樂しく遊び興じ、翌朝は會議を開き、王は玉座に座して人民の嘆願をお聞きになりました。人々はブラバント公の嫡子たる若宮の行方不明になつて以來、家督相續の爭ひが絶えぬが、是非とも王の出立前公平なる審判をなしてほしいと云ふ事を申し出まして、又その事件についての委しい事情を王の御耳に入れてよいや其上にて、王の御意見の儘にお任せしやうと言ふことを申しました。王は思ひ通り勇敢な兵士を集めることが出來ましたので、御機嫌斜めならず、一も二もなく其乞ひをお許しになり、兎に角人民の話を聞いた上、此爭についての正當なる判

決を下さうとまで仰せられました。王のお耳に入つた話の大略はこうであります。

丁度この話の起る六年前、善良なるブラバント公はなくなりまして、後に殘つたのは二人の子供で有ります。嫡子はゴトフライドと申し、若年ながらも氣品高く、姫をエルザと呼び、心柄といひ容色といひ、何れも勝れて美しく優しく有りましたので、皆の者共から少なからず愛せられて居りました。父の遺言に從ふて二人は親族なるテラモンド伯の監督の許に居りましたが、一體この伯爵テラモンドと云ふ人は戰地へこそは幾度となく出入致し、中々强い武士では有りましたが、餘り善人ではありませんでした。内心この二人を片付けて、自分がブラバントの首領にならうと云ふやうな野心を持つて居りました故、小供等がだん／＼立派に成長するのを見るにつけ、妬ましさがいや增し、どうかして、彼等を除き王國を占領してやらうと日夜に工夫をこらして居りました。併し人民が公のわすれがたみを愛して居る事を知つて居りましたので、其惡計をば決して誰れにも打明けは致しませんでした。

兎角して居る中、月日は經つて、ゴトフライドは到頭丁年に達しました。今や彼は伯爵テラモンドの監督を離れ、獨立して王國を支配しうるやうになりましたので、人民の喜は一通りならず、改めて主君としての歡迎の宴を開かうと、早速その準備に取りかゝりました。時に思ひがけない一大事が湧き出でために王國は亂れ、人民間には爭ひが起るやうになつたのであります。伯爵は色々と思案をめぐらした末、若しもエルザと結婚したならば、王國は自然と自分の手に歸するであらうと云ふ事に初めて心付きました。それで、早速自分の妻に貰ひ受けたいと云ふ事を、先方に申し出ました。處が强い武士には相違ないが、決して善人でもなく、又誠心ある人でもないと云ふ事を承知して居りましたエルザは、其乞ひを斥けたのは勿論、最愛の弟のゴトフライドから別れる事は出來ないと言ふ事まで云ひ添えました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

伯爵は無念に堪へず、どうにもして我が目的を遂してやらうと、壯大なる宮殿に獨り座して、又一工夫を廻らし初めました。

話變つて、此處に伯爵テラモンドの外に又エルザとゴトフライドに絶えず憎しみの瞳を注いで居るものが今一人有りました。オーツルドと呼び矢張り、ブラバント公の親族の婦人で有りましたが、丁度テラモンドが公爵家のあとを繼ぐ可きは自分であると信じて居りました様に、この婦人も亦、二人の小供さへなくば相續の權利は自分に有ると思ふて居りました。で、惡事の露顯しない様に、彼の二人の仕末をつけてしまひたいと、之れも專ら工夫最中であつたのであります。

オーツルドは勿論、テラモンドの様に戰爭などで名譽や勝を得る事は出來ませんでしたが、其代り他の武器を持つて居りました。サア之からがこの女が其恐ろしい敏腕を奮ひ出すと云ふ處であります。

話があともどりになりますが、オーツルドの母の死後、まだみづ子であつたオーツルドを育て上げた一人の乳母がありました。それが魔術使で魔法許り敎へ込んだのであります。ですから、オーツルドは呪文によつて人を鳥にでも獸にでも自由自在に變化させる事が出來、又自分の說く處は何事に依らず誠であると人に信じ込ませる力を持つて居りました。

エルザがテラモンド伯の結婚を斥けた事を聞き、非常に喜びまして、直ちに自分の立派な御殿に伯爵を招待いたしました。あでやかに着飾り數人の、侍女にかしづかれて、オーツルードはテラモンドを迎へ盛んなる酒宴を開いて、酒肴、果實、總て珍味の限りをつくして、もてなしました。そして、得意の怪辯をふるつて、伯爵に自分を世にも稀れなる富貴な力量ある眞實者と思ひ込ませてしまひました。やゝ頭腦の足りない丈けに伯爵は一度エルザに思ひをかけた事をも、今は忘れ果てゝ輕蔑を以て己が結婚を斥けるやうな、うぶな小女よりも、同じ結婚するなら、オーツルドの方が遙かに立勝つてゐると感ずる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

までになつて参りました。酒宴の後でテラモンドは到頭自分の計畫を婦人に打ち明けました。婦人は熱心に聞いて居りましたが、やがて、

『あなたの如き高貴な方のお申込みを光榮とも思はぬ愚な女のために、御力落しになるとはわけがわかりませぬ。實は私も、とうからエルザには冷遇されて居りますので、この恨みを是非とも晴らしてやりたいと思ふて居りました。若しあなたが私の言葉を御信用下さいまするならば、いつか必ず私共二人の前に頭の上らぬ様にしてやることが出來るでございませう』

テラモンドは熱心なるオーツルドの申出を入れ、先づ兩人結婚の上協力して事にあたつたならば、ゴトフライド及びエルザをなき者にする事も容易く出來るだらうとの意をもらしました。オーツルドは勿論これに同意致しました。

夏の一日エルザは弟と伴れ立つて、アントワプ市に近い深森を逍遙して居りました。この時見え隠れに二人の後をつけて行つたのはオーツルドであります。そして何にも知らずに話し乍ら歩いて居ります二人を絶えず妬ましさうに見守つて居りました。エルザは折々屈むでは森の空地に美しく咲きひろがつて居る野草の花を摘み集め、ゴトフライドは又愛に滿ちたやさしい二人の近づくのに恐れの念をも抱かず、枝のしげみを出たり入つたりしながら歌ふて居る愛らしい小鳥のさへずりに耳傾けました。忽ち何者にか驚いたやうに、ゴトフライドは飛び上りました。そして、

『エルザ、お聞きなさい!、あの鳥は一體何でしよう?』

一種不思議な、しんみりとした、鐘の音の如き叫び聲が眠げな夏の靜けさを破つて聞えました。

『何だか、見出してやらう。』

と叫びながら、ゴトフライトは其處を去つて、怪しい鳥の囀りを心當てに、しだ、い、雜草のおひしげつた深い籔の中へと分け入りました。身に禍のふりか

からうとも知らぬエルザは、弟の姿を見送り乍ら、自分は道の傍に座つて集めた花を束ねつゝ餘念もなく獨り遊んで居りました。

鐘の如き不思議な鳥の調べは、しばし聞えて居りましたが、間もなく絶えてしまひました。併しゴトフライドは歸つて參りません。

『きつと遠く行つてしまふたに相違ない、もう今頃はお壕のある古城の近くあたりに居るだらう。ア、そして日ぐれ近くになつて、地にうつる影の長くなつたのにも氣がつかないのだらうよ、私行つて探さう！』

獨りこう考えながら聲張り上げて幾度となく呼んで見ました。けれども答は有りませんでした。エルザは野鳥の尤も好む場所で、いつも其處へ行つてはゴトフライドが鳥を眺めて遊び暮すのが常である城跡の方へと道を急ぎました。

城は小山の上にありまして、まわりは深い壕で取り圍まれて居りました。壕の淵は蘆の葉や蔓草が一杯に生ひかぶさり、滿ち／＼た水の面にはクリーム色の水蓮の花と廣い平な葉の數々が、美事浮き出て居りました。

『ゴトフライド、ゴトフライド、何處にゐるの？』

エルザは再び呼んで見ましたが、矢張り返事はありませんでした。唯、今迄ゆるやかに壕のまはりを泳いで居つた美しい眞白の一羽の鵠が、エルザの前を過ぎながら、一聲高く叫んだ許りでありました。しかし、心の躁いで居りましたエルザは、なぜこの様な淋しい場所にこんな美しい鳥が居るのか、又今迄、弟と來た折には野禽の外に嘗て見かけた事もなかつたのになど云ふ事を考へる餘裕もありませんでした。エルザは遂に家路を指して引返しました。

『ゴトフライドよ／＼、何處にゐるの？』

叫びながら小走りに走つて參りますと、途中でオーツルドに出遇ひました。

『あなた、ゴトフライドにお遇ひになりましたか』

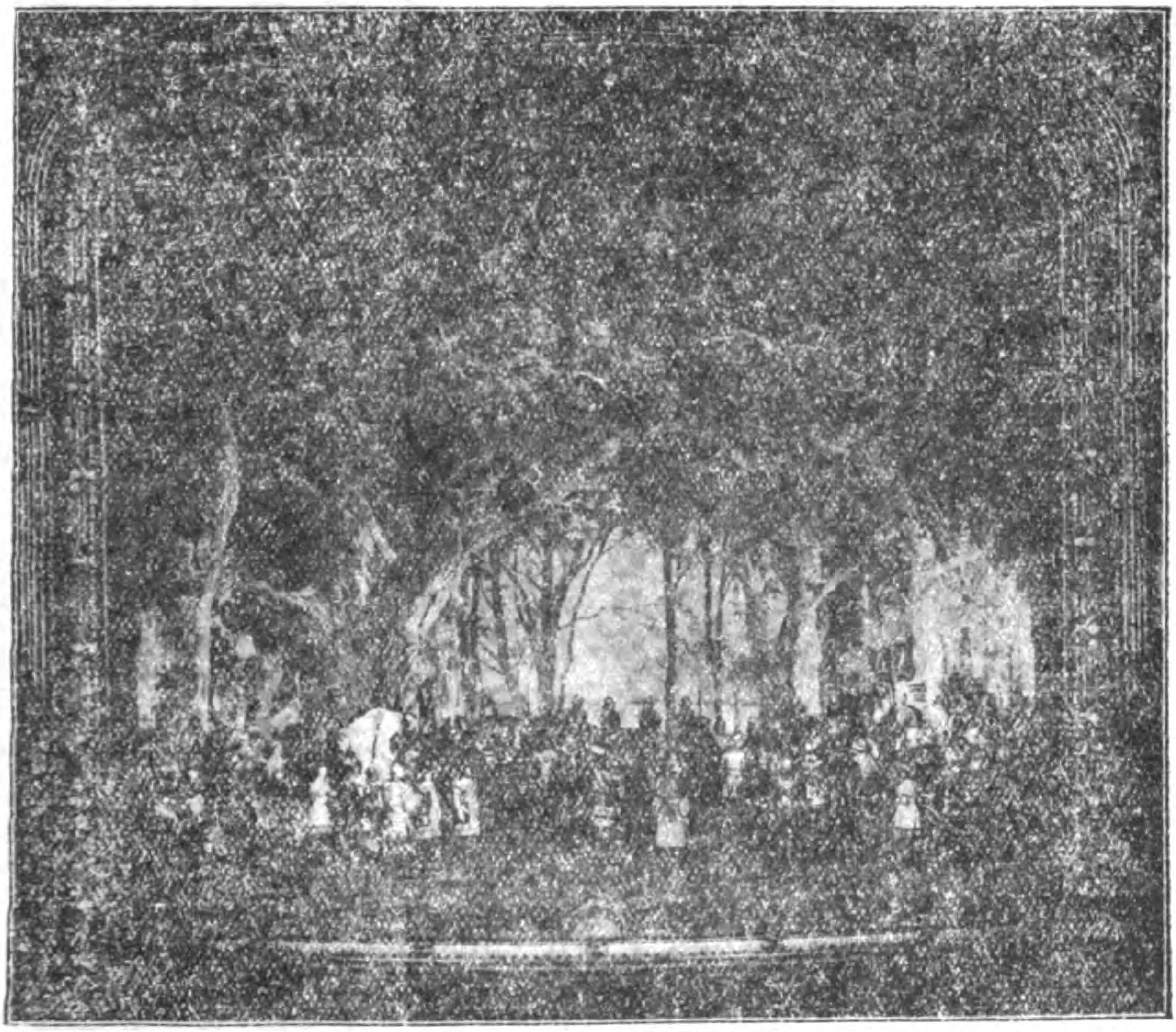
いきせきとエルザは尋ねました。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『不思議な鳥のなき聲をたどつて、私に別れた切り、何處にも姿は見えませんが……』

『兎に角家にお歸りなさい。その上、あなたの弟さんが一體どうなつてしまつたのか聞きませう。なんだか、どうもあやしいやうだ』

オーツルドは泣いてゐる小女を引き立てゝブラバント公の宮殿へと歸りました。オーツルドはゴトフライドがどうなつたのかよく知りぬいて居つたので有ります。其れも其筈、



エルザの裁判

ワイスバアデンの王室劇場

不思議な鳥の泣き聲を眞似てゴトフライドをエルザの許から離れさせたのは自分であり、又彼を魔術の力で變形させたのも自分であります。エルザが先程お城の壕の中で見たといふ鳥は即ち彼のゴトフライドであつたのでありました。

それとも知らず、エルザはお城に歸るや否や、華族方を集めて、弟の行方不明になつた事を物語りました。一同は勿論

手に手をつくして探しまわりました。併し一向に手掛りが見えませぬ。エルザはなくなつた弟の事のみ考へて日夜、涙に暮れて居りました。

　この事件が起つてから數月の後、ブラバントの華族や市民は最早詮方ないと云ふので、エルザを後嗣としてブラバントの支配の權を與へやうと云ふ事に一致いたし、先づ會議を開いてその儀式に必要なる準備を相談いたさうといふ事になりました。處がいよ〳〵その大切な日が參り、華族や人民、みな會場へ集りますと、オーツルドは立ち上り、大聲でエルザは王國をわがものとせんがため、其弟を殺害したと訴へ出ました。ゴトフライドの行方不明になつた丁度その日、自分も亦森の中に居ると、古城の壕の邊から助けを呼ぶ聲が聞えた。行つて見るとエルザか城の中庭の古井戸にうつむいて居つたが、最早その時には弟の姿は見えなかつたと云ふ事まで申し述べました。

　エルザは恐れに滿ちて、このすさまじい物語に耳を傾けて居りましたが、やがて奮然として立ち上り

『貴女はマア途方もない惡いことを仰しやいます、貴女のお言葉の事實でない事はよく御承知で入らつしやいませうに。弟は私に取れば生命よりも大切でございます。今弟が生きて出てきてくれましたなら私は代りに自分の生命をも、よろこんで差出す積りでございます。』

　こんどはテラモンドが立ち上りました。そして如何にも氣の毒な次第であるといふやうな、いつはりの言葉を並べ立てた後、自分の妻の物語の事實である事を證するために申しました。

『エルザは我々すべてを欺いて居ります。私はエルザがブラバントの支配者になりたいと願ふて居るのを幾度となく聞きました。今弟を殺害したといふ事を聞いても、私には一寸も不思議とは思ひませぬ。』

　伯はなほ、かういふ事を申しました。實は王國をエルザから取つて公爵の第一親族なる彼に渡すべきである。彼は勇氣もあり、名譽もある事故、王國の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

安寧と榮譽とを保存するに最も適當せるものであると。この言葉はつひに容れられませんでしたが、兎に角、會議は混雜を以て解散されました。

　エルザの無實の罪なるを知つて居る人も多くありましたが、其人々さへ如何にして其の無實の罪なるかを證明してよきか知りませんでした。故公爵の嫡子たるの故を以て、ゴトフライドに進んで仕へやうと、今迄思つて居りました人々は、エルザの樣な溫厚なる婦人の此騷動絶え間ない時代に處して、能く王國の安寧を保つて行く事は六ケ敷からうと信じ、又テラモンド伯と戰地に於て生死を共にした事のある部下の者共は、彼れの勇氣と指揮者としての才能をめでゝ、たれ一人不良なる性行に頓着する者は有りませんでした。斯くして町は幾派にも分れてしまひました。

　すでにヘンリー王のアントワープにお着きになつたといふ彼の夏の日にさへも、人民は互にのゝしり合ひ打ち合ひさへもした程でありました。それで誰に人民支配の權利があるかを王に定めていたゞく必要が出來たのであります。

　話變つて此方、エルザは嘗つて弟と共に住み馴れた宮殿に今は淋しくも涙と祈禱とのみに日を送つておりました。弟は大方死んだのであらうか、其死と自分とは少しも關係のないと云ふ事を、どうして證據立てゝよいやらと思ひ悶えて居りました。すると不思議な事には王の到着の前夜、エルザは一つの幻をみました。開け放つた窓の許にひざまづいて、天の助けを祈つて居りますと、フト傍に一人の氣高き武士が現れました。磨き上げた銀の樣に輝いた甲冑に頭から足の先迄をつゝみ、胸には金の角笛を下げ朝日とひらめく刄の柄に右手をかけて居りました。其柄は十字の形をなして居りました。兜の左右には雪と白き羽根をいただき、物いふ折の眼ざしには情の光の滿ち〳〵して居りました。

『エルザよ、恐るゝ勿れ。天は我身の味方なり。我れ天使を帶びし武夫として、御身の安寧をはからむ

がために戰士たらん。』

次の日の正午、王は身邊に會議を開き、華族兵士及びアントワープ市の代表者は王の周圍に集りました。此時、眞白の服を身にまとひ、美しき淺黃色の目に深き悲しみの色を含んで、其場へ連れ出された美人はエルザであります。『貴きわれらが姫よ。生命長かれ』と人々のやかましく叫ぶのを、王はお止めになり、さてエルザに向ひ、『ブラバントのエルザよ御身の弟の死亡につき、御身の嫌疑を受け居るを我れ聞けり。この罪惡を御身の犯せし覺えなきを王たるわれに向ふて證すべき言葉ありや。』

エルザは首をたれて、しとやかに答へました。『慈悲深き王よ。われは唯わが身の潔白なりといふ外、殊更に申し述ぶ可き言葉を知らず。此上は唯かの武夫の天より下りて、わが生命を絶たんと欲するものの讒言より救ひくれん事を願ふのみ。』『美しき姫よ其の武夫とはそも何者ぞや』王の問ひに、エルザは優しく朗かなる聲で、幻に見た武夫の事及び其の幻の助けを約した事を物語りました、王はその淸き顔、その氣高く無邪氣な態度を御覽になり、世にも恐ろしい、この罪惡を犯した者は決して彼女ではないと云ふ事を御感じになりました。

併しテラモンド伯は奮然として立ち上り、エルザが無罪の證明を要求いたしました。そして申しまするに、『エルザ許りであります、ゴトフライドと最後まで居りましたのは。彼の日、森を散步して居つた際、ゴトフライドに何をしたか話さして御覽なさい。天から來ると云ふ武士には、王よ、私は何時たりとも相手いたすでありませう。誰が來るとも苦しくありませぬ、生命を的に戰ふて、何れが誠かを證して見ませう。』『エルザよ、御身はこの決闘を受け入るゝや』、王の言葉に、エルザは聲低く、『然り。王よ、願くは、天の武夫こそ、わが保護者なれ、わが戰士なれ。』『然らば傳令使に命じて、直ちに決闘の報をつたへよ』と王は申しました。命に從つて耳をつんざくラッパの音は起りまして、同時に傳令使は聲は

り上げて、『ブラバントのエルザの戰士たらん者は誰ぞ』とよび廻りました。

黄金色の夏の光はゆるやかに流るゝ水の面に反射して、王、テラモンド、エルザを取り圍んで居る人々の上に落ちました應ずる人は誰だらうと公衆はかたづを呑んでまつて居りましたが、誰一人現はるゝ者は有りませんでした。

再び傳令使の眞鍮のラッパの音は暖き晝の空氣をふるはせました。

エルザは漸次無言の後遂に地に跪いて祈りました

その時幽な角笛の音が遙かに聞え出しまして公衆は叫び出しました。『武士よ。武士よそれ向ふから來る。』聲に應じて一同は川の方へと向きますと、鏡の如く滑らかな水の面をかすめて、一つの小舟が此方を指して進んでまゐります。見ればその舟は雪の如き眞白な鵠に引かれて居りまして、内にはエルザの幻の武夫が立つて居ります。動く度毎、銀の甲冑は閃き渡り傳令使の呼び聲に應じた金の角笛は胸のあたりに下つて下ります。武夫は十字の形をなした柄の下に焔の如く輝いて居る白刄に身をさゝえて居りました。

幻の武夫來る

鵠は公衆の近くへと參りました時身をかゞめ武士

は岸へと飛び上りました。眞白の羽根のついた兜をぬいで彼は先づ王の前へとひざまづきました。オーツルードのおどろきは非常なものでありました。鵠の首の周圍の金の鎖で之れがなくなつたゴドフライドであるといふ事も知つて居りましたし、又今王の前にひざまづいて居る武士は普通の者でないと云ふ事も承知して居りました。『ブラバントのエルザのために戰はんとて汝は來りしや』王の御尋ねに、其武士は、『エルザ姫は無罪にて候。われその證を立てんがために、來れり。テラモンド伯よ、われ汝の挑戰を受け、死に至るまで戰ふの覺悟なり』

直に會場は片づけられました。戰のはじまるや人々は固唾をのんで二人の武士の互に切り込む鋭い鋒先を見守つて居りました。エルザは王の傍にひざまづいて居り、オーツルドは、高慢と怒りに滿ちた顏をしてエルザのわきに立つて居りました。

すると恰度オーツルドの氣遣ふた通り、二三度打つたかと思ふと、テラモンドの刄は手から拂ひ落されて、彼れは、たわいなく地上にひれ伏して、名も知らぬ武士の慈悲にすがりました。

『立てよ、テラモンド伯、われ汝の生命を助くべし天は以後價値ある事に之を用ゐん事を汝にのぞみ給ふ』公衆の罵り騒ぐ聲をうしろにしてテラモンドはオーツルドと共に、其場を立ち去りました。武士は勝利の報酬として、エルザとの結婚を王に願ひ出で、王は直ちに、之を許可なさいました。『但し此處に一の條件あり』と武士は申しました、『誓を要する約束あり。我れの誰れなるや、又何處より來りしやを決して問ふなかれ。若し彼女にして、われを疑ひ、この問を發せばわれらが結合もそれまでなり。其時、我れはわが鄕土に歸るべし。此條件をかたく守る事を誓ひ給ふや。美しきエルザよ御身は我れ必ず誠ある夫として、心より御身に仕ふべし』

二人は手に手を取つて、王と共に公爵の宮殿へともどりました。直に結婚の準備は初められ、王も當日御出席を承諾なさいました。（第一幕終り）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

隨感

◎近頃のわが大發明

野口幽香子

私共次第に年をとるにつれ、世の中の用事はふえて來て、責任は益々重くなるばかり、それに伴なう體力は殘念ながら反比例をして、よく物を忘れたり早く疲れるといつた風になつて參るのは、自然の狀態でありましよう。そこで私考へました、何とか工夫はあるまいか、どこかに精力の節減のしやうはないものであらうかと。一體私は極めてせつからの氣の小さい人でして、一寸汽車に乘るとしても、餘る程に時間を取つて置きながらどうも氣がせかれる、電車に乘つてる内からもうせか／＼として、もしか遲れはせぬか、友達はちやんと來るかしらん、席がなかつたら困つたものだ、どうもけふの電車が遲い樣だ、時計を出して見る、服部の時計とも見くらべて見る、といつた風で、まだ新橋へ着かぬ内に私の精力はもう大分つかひへらしてゐるといふ事に氣がつき、我ながら我が愚に愛想がつきましたので近頃大發明を致しました、曰く

何を考へて居つても電車は着く時でなければ着かぬといふ事。

爾來私は電車に乘ると、先づ注意して外の事を考へる、新橋へ着く迄は私の心は、別天地に遊ばせて置くといふ事に次第に修養を積みつゝあります。

今一つ、例へばけふは殊に責任の重い日である、もし一寸誤れば大失態になるといつた樣な日は、氣の小さい處から心配をします、が、これが極わるいといふ事に心付きました。そこでそんな日の朝は特に神に祈ります、終日の仕事を大能の御手に任せて安心してしまひます、私共は大きな事はお祈りもし任せもしますが、扨日々の小さな事になりますとこれを忘れます、そこに氣が付きましたので、瞬間も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

すきのない活動の間にも思ひを天にはせて其保護を仰ぎます。かゝる有様で、近頃は疲勞が餘程少くなつた事を感謝して居ります。

◎廢時利用

海老名　みや子

人の智惠が段々進んで來まして、經濟思想の增して參りますので、近頃は廢物利用が盛んに行はれます。今迄紙くずと一所に棄てられたペン先がお土瓶しきや、花瓶しきとなつたり、落松葉で綿を製造するやら樣々のよいことが出來ます。いまにはきだめから黃金を掘り出す樣なことも出來るかもしれませぬ。ところで私は此廢物利用を精出してするがよろしいと思ひますが、又廢時利用と云ふことを心がけねばならないと思ひます、西洋人は此廢時利用がよほど上手でありますが、私共日本人はとんと此習慣がありませぬ。久々で友人を訪ふ。無論手ぶらで行つて二時間も三時間も、どうかすると半日も終日も向ひあつて世間ばなしや昔話をして、ア、面白かつたといつて歸つて參ります。友情を溫めるといふのはよいが、それ程の時間をかけずとも、又むかひあつて手をつかねてお話せずとも、も少し時間を短くするとか、又は更に何か編物か手仕事を爲しつゝお話するとか、此半ばすたつた時間を貴いことに利用することが出來やうと思ひます。家に在つてもさうです。食事が濟んだ、昔ならば一寸一ぷくといふ所何のわけもなく座つて二十分や三十分お話をして居ます、甚しきは何を考へるともなく、只ポカンとして居ることさへあります。此ポカンの時間や、無駄話の時間が一日にどの位あるか、私共一寸計算して見度いと思ひます、案外なすたり時間がありはしまいかと思ひます。そこで私は小供の時から讀書と仕事の習慣をつけて、わづか五六分の時間でも一寸書物をするとか編物をするとか、何か手輕に出來安いことをこしらへて置て廢時を利用するといふことに致しましたら、私共知らずの〳〵間に思ひ設けぬ智

識を蓄へ、寳を積むことが出來やうと思ひます。マア一寸出かける時は小さな本なり雜誌なり持て參りまして、少し遠い所なれば電車內でも讀むことが出來ます。何かいつでも身をはなさずもつてることが必要です。又仕事ではやはり編ものでしやうか。手輕でおはなししながら出來ますから、廢時利用には一番よいと思ひます。手袋なり靴下なりあみかけて置きますといつか出來上ります。自分ばかりでなく家中のものにこの習慣をつけましたら大したことが出來ましやう。殊に子供達には小さい時から此習慣をつけて置き度いものであります。

◎復活

笠間しのぶ子

私が初めて柏木の先生に御目にかゝりましたのは安息日の朝で、先生は丁度杖を曳いて祈の森から歸つて來られた所でした。奥樣が私を紹介して下さると「そうか」と仰つて二ツ三ツ教會の事や學校の事を問はれて後「これから仲よしにならうね」とにこやかに笑まれて、直ぐ教の家の方へゆかれました。私は先生を一見すると直ぐ昔々ユダヤの野にあつた、プラフエツトの一人を見る樣な氣がしました、先生は丈の高い色の黑い毛の濃い方です。「ウム」と眤と見られる時は恐いけれども、「さうか」と笑まれる時には父樣の樣な氣のする方です。先生のお顏には黑い影があるしかも深刻な熱烈な黑さです。私は「曙に至るべき暗」といふ句を思ひ出しました。それ以來安息日毎に柏木に行つて遠くの森の色を見るのが樂になりました。其綠が濃くなれば先生の御祈の色に染められる樣に思ひ、紅葉すれば先生の熱き祈に燃える樣に思はれるのでした。

　或初夏の淸々しい朝、先生は復活の話をせられた中に、外國の有名な神學者が同じく復活を論じた最後に、「自分は總ての議論を去つて外に、一つ確固たる確信がある。それは自分は幼い時から母を非常に敬慕してゐるものであるが、今まで母から教へら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

れた事で一つでも過つて居た事がない、私はその命令の凡てを保つて今日に至つて、一つも悔いる事がない、そして母が最も熱心に最も力を罩て敎て吳れた事は復活といふ事であつた。此事が夥多の議論に勝て私の動かす可らざる確信の基となつてゐる」と云れた事をひいて語られた。其時私は學校にゐて聖書の研究をしてゐる頃、よく親しい友との間に復活といふ事が問題になつた事を思ひ出しました。私達は始めからクリスチャンホームに生ち、クリスチャンスクールに學んだ。殊に女であるから凡てを疑うと思ふより、信じたいといふ心の方が切であつたのです。學校のライブラレーから種々の本を引張り出して、小供ながらに相應な議論をした末に「だつて聖書にある事の凡てが直實であり、キリストの敎へられた事が悉く誠であるのに、唯一つ此復活といふ事、しかもキリストが世の罪を負うて十字架の上にかけられた其貴い息を引とられる最後に、尙「吾今日爾と共にパラダイスに在らん」と明らかに來世を敎へられた事が、如何して何時までも私等の疑問となるのでせう」と何となくうら悲しく、シンミリとなつてしまつた事がありました。前の例にあつたその正しかつた信仰の篤い御母樣の敎へられた事が、そんなに深く其息子さんの信仰の力になる樣に私達もつと〳〵優た完全な御父樣であり、先生であるキリストの貴き血の價で敎へて下すつた復活といふことが、單に一つの事實であるばかりでなく、又議論であるのみでなく誠の私等の唯一の望みとなりたい

◎心なほ弱きは如何

小橋三四子

我々の弱い心は始終周圍の刺戟に波立たせられるそして人を責め、世間を厭ふて住みよい處を求めて、いつも逃げ足を踏んで居る。何といふ意氣地のない事であらう。それが世の中なのだから、善い方を見て惡い方を見まいとする。然し目もあり、耳ある以上、さやうな事は不可能である。只神に結べる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

自身あるを知りて自分を通じて神の榮えを現はさうとする時、云ひかへれば周圍を神の力によりて改善し、感化せうとする時、自分を通じて天上地上の間に一つの磁力の通ふを覺えて、わが足は始めて正しく地上を踏む事が出來る。我々は神に結べる自身あるを知る唯一の特權なる祈禱に入る事が少ない爲めに、心がなほ弱いのである。

時事其折々

一記者

エリオット博士の來朝

吾等は幾度となく世界の名士を迎へる中にも今回來朝せられたエリオット老博士の如きは、國民が誠心誠意を以て歡迎せねばならぬ方である。

エリオット博士は米國ハーバート大學の名譽總長で、今年七十八歳の高齡である、曩頃靜養をかねて

カーネギー翁の平和基金による平和運動視察のため夫人及び孫孃を伴ひて世界漫遊の途に上られたのであつたが、支那朝鮮を經て、去る十四日門司に來着せられ、大阪京都奈良を經て、二十四日午後八時無事入京せられた。そうして　天皇陛下に於かせられては、去二十八日拜謁を仰せつけられ、同時に夫人孫孃にも濱離宮にて午餐を賜ひ、又内田外相初め、官民及公私諸團體等は何れも熱心なる歡迎を表しつつある。私は愛兄姉を代表して深き歡迎の意を表し此機を利用してエリオット博士に就て少しく愛兄姉各位に語りたいと思ふ。

博士は千八百三十四年三月米國ボストン市に生れられた方である。父君は市の名望家であつたから、博士は幼時より順境の間に人となり、夫れ〳〵學校の科程をふんで、遂にハーバート大學に入學せられたのであつた。理化學は博士の尤も興味を以て研究せられた所であつたので卒業の際は成績優等の故を以て擧げられて助教授となり、千八百六十六年には教育制度研究のため歐米諸國に留學せられたのであつた。然るに歸朝後千八百六十九年にはハーバート大學監理會の推薦により、同大學の總長にあげられ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

米國最古最大の大學に長たるの榮職に就かれたのであつた。時に博士の齡僅かに三十五歲であつた。斯くの如きは今日と雖も誠に珍らしきことで、其當時にありては大學內では勿論、世間一般の輿論も、餘りに突飛な措置であるとの批評が高かつたのであるが、博士は深く確信する處ありしと見え、多くの批評を馬耳東風に聞き流し、一意專心に大學の改良經營のために盡された。

されば校運は隆々として發展し、諸科の學は益々整頓し、七八百名なりし生徒は幾年を出ずして數千名に增し、財政も非常に充實して遺憾なく其擴張發展を圖ることを得るに至り、凡ての人をして良總長を得たるを謳歌せしむるに至つたのである。博士其職のあること實に四十年、七十五歲の高齡を以て千九百九年に其職を辭し、學校は之を名譽總長に推し永く其の德風を仰がんとしてをる。

博士の同大學に對する貢獻は一々擧げて數へることは出來ない。而して同大學に對してなした功績は同時に米國の凡ての大學を益したのであつて、此點に於て博士は獨りハーバート大學の恩人たるのみならず、米國の凡ての大學の恩人である。

博士はユニテリアン協會の信者であるが、誠に敬虔篤信な方で、之まで多忙な職務にありながら、熱心に敎會に出で、學生の宗敎的薰陶のためにも斡旋の勞を惜まれなかつた。博士の令息サミユエル、エリオットはユニテリアンの牧師で、現に博士もユニテリアン協會の協同事業に會長として盡力して居られるのである。而して退職後はカーネギー翁平和運動の顧問として世界平和のために其老餘の身を惜まず盡力して居られるのである。我國にもハーバート大學に學んで、親しく博士の薰陶をうけた人士が少なくない。故小村侯も其一人で、金子子、栗野子、目賀田男、吉川男、宮部博士、高杉博士、堀江博士、伊澤修二氏等も其人である。

死せる英雄に對しては無上の尊敬を拂ひながら、生ける偉人を見のがすは凡夫の常である。吾々は今や世界に稀なる學界の偉人を迎へつゝある。都下の人士は來つて博士の謦咳に接せねばならぬ。博士はかのブース大將の來朝と同じく再び見ゆるべからざる方であるからである。

編輯だより

▲鬱陶敷い梅雨も程なく晴れて、天も地も戸を開いて人を迎ふるかの樣な夏の日が參ります。高山の氷も解け、地下の蟲も出でゝ働らくこの日は、自然が私共に最も親しみを持つ時であり、從つて山間にも海邊にも、自然が送る私共の友は數多く、これと共に樂しむ事の出來るのは、常に得られぬ惠みであります。

▲照りはたゝく日光を誰れか敵といふ。彼れこそは萬物の生命を更らに旺ならしむる力の源であります。草木は愈々綠深く、花は濃き色、強き香ひを帶びて之れに和す。賢き蟻や蜂はこの日に出でゝ一年の食を得んとて、蜜を求むるに忙し。夏日に働らく人よ、燒くが如き日の猛威と鬪ふを止め、力の源なる夏日の日光てふ勇者と共に、太鼓を打つて、步調を揃へ給へ。その時他に知らぬ愉快あらん。

▲來月號は例年の通り夏期號として、皆樣に見ゆる筈であります。記者は山間に海邊に樂しむ多くの友を考へつゝ、また都のたゞ中に孜々として働く多くの友をも思ひつゝ、何れの方々へも夏としての特別の消息を送りたいと考へて居ります。讀者諸氏の御健康を祈る。

▲ローヘングリンは彌々本號より揭げ始めましたが、それは僅に三分の一であります。これより愈々佳境に入る事で御座います

（三四子）

定價

（郵稅加算）	內地及朝鮮支那	外國
一部	金拾貳錢	金拾六錢
六部（半年分）	前金七拾貳錢	前金九十貳錢
十二部（一年分）	前金壹圓四十錢	前金壹圓七拾五錢

廣告料

一行（廿三字詰）	金廿五錢	一頁	金拾圓
四半頁	金三圓	內表紙	金拾貳圓
半頁	金五圓	外表紙	金拾八圓

猶ほ引續き御廣告の向へは特別大割引可仕候

摘要

▲本誌代金は總て前金にて御拂込み被下度候

▲郵券代用は一割增の計算にて御送附被下度候

▲御送金は振替にて拂込るゝ方便利に候但手數料金壹錢御加へ被下度候

▲通信、爲換、寄贈雜誌等は必ず發行所宛に願上候

明治四十五年六月二十五日印刷
明治四十五年七月　一日發行
東京市小石川區林町四十三番地
發行人兼編輯人　海老名彈正
東京市小石川區丸山町四番地
印刷人　相原一郎介
東京市赤坂區田町五丁目十一番地
印刷所　齋藤活版所
東京市小石川區林町四十三番地
發行所　新人社
電話番町二五四四
振替貯金口座一四〇〇五

醫學博士　加藤照麿述

改訂増補 育兒法

定價金八拾錢
郵稅八錢

我國小兒科の泰斗加藤博士が、初生兒の取扱より始め、母乳及び牛乳の與へ方、種痘、生歯、食物、體温、便通、尿水等に關する注意並に小兒の罹り易き種々の病氣とその手當に就て、母親の心得こなるべき廉々を、平易懇切に講述せられたるもの。今回博士の嚴密なる校閲を經て、多くの改訂を加へたるのみならず、新に五章六十頁餘を増補し、育兒書として眞に完全なるものとなれり。子供をもてる家庭に必ず一本を備ふべきは勿論、出産又は新婚の贈物としても最も適當ならん。

（「改訂増補」の文字なきものは舊版也、御買求の際御注意被下度候）

東京小石川雜司ヶ谷町
振替東京一一六〇〇番

婦人之友社

電話番町
三六九八

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

新人第拾參卷第七號目次

（七月一日發行）

●社　説

正統主義の批判　主　筆

●教　壇

人格の不滅　海老名彈正

●想　苑

東西思想の交渉問題　姉崎正治

基督教と佛教の接觸　富永德磨

予の見たる禪觀（四）　金子白夢

郷土詩人フレンセンの基督觀（三）　大塚楠男

現代思想の動搖と吾人の使命　籾倉作助

●文　苑

アピキウスの死　中田棚麻呂

思ひ出で　雨　江

習作より　和地永生

●雑　俎

來朝せるエリオット博士　記　者

大學經營者としてのエリオット博士　目賀田種太郎

社會の公人としてのエリオット博士　堀江歸一

宗教家としてのエリオット博士　阪井德太郎

エリオット博士の薫陶を受けし我國の名士　記　者

故郷と幽靈を讀む　近藤良薫

帝劇を見て感ずる儘　波間の人

新緑日記　鬼　韵

●訪　問

島崎藤村氏を訪ふ　聖山生

●講　演

基督論　海老名彈正

馬可傳講義　同

●文藝小觀

▲來らんとする宗教文學▲悲しき玩具をよむ▲三田文學と白樺▲マグダ問題

●時　評

▲布教者の注意▲人間七生國賊を滅さんとは楠公の言か▲青鞜の新しき女▲新學士を迎ふ▲友に與へて教界の近狀を報ずる書

●其　他

▲彙報▲編輯餘錄▲寄贈書紹介

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

院長診察、月、水、木、金午前、入院、診察應需

林、峰間、兩副長ハ目下當院ニ在勤、

(電話本局)八八八八(病院用)八九八八(私宅用)

東洋内科醫院

東京神田區駿河臺鈴木町二御茶水橋附近

院長 醫學士 高田畊安

神奈川縣高座郡茅ケ崎海濱從停車場半里

電、チガサキ二番

南湖院

河野、高橋兩副長ハ目下當院ニ在勤、

院長診察、土曜日午後、入院、診察應需、

新女界第四卷第七號

明治四十五年七月一日發行

明治四十二年三月廿九日第三種郵便物認可

定價金拾貳錢

東京市小石川區林町四拾參番地 新人社 振替口座東京一四〇〇五

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN